サッカーやろうや

成金ヤック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イナイレの世界に転生した平凡な男田中健太が、非凡な超次元サッカーを駆使してＦＦで優勝目指して頑張る物語。

プロット書いての投稿は初なので初投稿です

目次

キャラ設定等 ―― 1
幼少の決意
周りは０から自分は１から ―― 4
紅蓮 ―― 8
安寧と平穏 ―― 12
堕ちし光明 ―― 17
黒い絵の具 ―― 23
想いは重なるほどに重くなる ―― 27
決意や誓いそれは呪い ―― 32
夢の始まり～目指せＦＦ目指せ全国制覇～
全てが動き出す ―― 37
小さい勇気 ―― 44
通過儀礼 ―― 50
サブタイトルって難しいよね ―― 57

キャラ設定等

田中健太（たなかけんた）　（火）

本作の主人公。元平凡な少年、間是和中学校出身。自分は天才と言い聞かせてる凡人、幼少の頃の姉の事故を未然に防げたものと自覚しており現在は復讐に燃える。基本攻めも守りもそつなくこなせるタイプであり、ポジションは動きやすいＭＦに拘る節がつよい。転生者スペックを遺憾無く発揮し貴重な幼少時をサッカーに全振りした脳みそボールやろう、身体能力は弛まぬ努力で身に付けたものだが学力は元々のスペック。体から火を出したり魔神を出したりするものは適正属性以外使えないが体捌きで使えそうな必殺技は軒並み使用可能（例ジャッジスルー、ムーンサルト）

好きな物肉じゃが

嫌いなものロールキャベツ

取得必殺技（気を練って発動するタイプ）

ファイアトルネード

ジ・アロー

罪ノ大剣（つみのたいけん）

田中真弓（たなかまゆみ）

主人公の姉。非凡な少女、弟と違い本物の天才。中学２年の頃にＦＦの本戦に出場した時対戦校が帝国学園だったため、敗北を恐れた影山総帥の必殺技トラックアタックによって両足の機能が停止、サッカー生命は絶たれてしまった。当初は酷くショックしたが本人が楽観的な性格の為高校生の年になる頃にはだいぶ落ち着いた。本人は今でもサッカーが好き。

必殺技

ファイアトルネード

イカロスフィスト

蓮馬小百合（はすばさゆり）

主人公のヒロイン、東愛知区立間是和中学校出身、ただの女の子、運動はできない。主人公の家のお隣さんであり、ずっと主人公と過ごしていた。健太が復讐の道を進むと知っても健太と共に居続けたいと思う反面笑顔でサッカーをやって欲しいと思っている。種子への愛が行き過ぎ、中学に入ってからはその行為がストーカー地味てきた、尚本人はストーカー行為をしていると自覚はない模様。ただその本質はいつまでも変わらずずっと優しいままである。

必殺技

なし

田中美智子（たなかみちこ）

主人公の母、体が弱い、元名家のお嬢様、夫と駆け落ちしている過去を持つ、実家とは絶縁状態。娘の足を奪ったサッカーを少なからず憎んでいる。

田中宗次郎（たなかそうじろう）

主人公の父、そこそこの大手企業の部長クラス。妻と駆け落ちしている過去を持つ。娘の足については自分が何とかすると気負いがちな節がある、仕事はできる。

田中樹（たなかいつき）

健太の友人、犬歯がチャームポイント、元気

亀戸平助（かめとへいすけ）

健太の友人、イケメン、健太の小学校の頃のチームメイト。健太と相見える日を夢想して日夜修練に励んでいる。

鮫田和樹（さめだかずき）

目つきも柄も悪い札付きの不良。喧嘩屋と呼ばれる程に喧嘩っ早くつよい、教師も手を焼く問題児。次何か問題を起こせば退学処分を下されると言われたので最近はサッカー部の部室で大人しくしていた所、健太に勝負を挑まれ無事惨敗。それから何度か健太に反抗したものの全てファウル率の高い技で黙らされている。尚健太は必ず1回は殴らせているので1発は1発理論でジャッジスルーをぶち込ん

でいる、彼は今日も外周を走らされることだろう。

必殺技

なし

鳥井田（とりいだ）　岳（がく）

のっぺりとした巨人、いつも眠たげで授業中も起きてるのか寝てるのかでこちらも問題児。健太にボールごとシュートされてからは部活動には真面目に取り組んでいる。

必殺技

なし

多摩裕次郎（たまゆうじろう）

ものすごく小さい男の子。気が弱く厄介事に巻き込まれやすい。元いじめられっ子。サッカーは初心者の為恐る恐るプレイしている、しかし彼はきっと大きな成長を遂げることだろう。

必殺技

なし

幼少の決意
周りは0から自分は1から

暗い……最初に思った事はただ暗いということだけだった。
それは幸せな微睡みであったし、何より暖かかった。
外に出たくない。
そんな怠惰な感想が飛び出る位にはこの心地よい闇に浸っていた。しかし現実は非常である、もぞもぞと体が移動しているのがわかる。これは自分の意思か否か。まぁどちらでもいいだろう、そろそろ目を開けて大学の準備を始めねばならぬ。しかしどうだろう目があかぬではないか、さては目くそが瞼にくっついて離れなくなってるのだな？
そう思い手を瞼付近に持ってこうとしても上手く動かない。
変だなぁふざけてる場合じゃなくなってきたぞ。暗闇でジタジタしてると頭の方からズルリと移動した。
うぉ……眩しっ
明るい蛍光灯、よく聞き取れない声、見知らぬ男女と慌てる看護師さん。その全てがハッキリと見ることは出来ないが大体事情は察したし。自分の心象とすべき事が合致してしまった。
不詳私２４歳大学生（名前が思い出せなかった）人目もはばからず大泣きする事になりました。
「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛」
「おめでとうございます！　元気な男の子ですよ！」
「あぁ良かった……本当によく頑張ってくれたよ。美智子！」
「産まれて来てくれて……ありがとうね」
どうやら僕は大勢に祝福されて２度目の生を送ることになるらしい。

さて状況の整理を始めよう、時は進む事約1年と半年。授乳とオムツの羞恥に耐えながら過ごすことになっている乳幼児期間。先ずは自己紹介から始めさせて頂こう、僕の名前は田中健太、一般家庭に生まれた非凡な乳児だ。前世はうだつの上がらない大学3年生、特に事故にあったとか神様にあったとかの記憶は存在しない。しかし僕は自分の名前意外の記憶はハッキリと覚えている。松葉教授の講義の内容から親友の荒木のタバコの銘柄と荒木の彼女が4股かけてた事まで鮮明にだ。なんなら楽しみにしてたゲームソフトでさえ記憶に新しい。ただ転生するような事象に陥った記憶はただのひとつとして存在していない。

この1年と半年の間うんうん…失礼えんえん泣き声を上げながら考え尽くした事だが、結局これといった答えは探せずにいる。そしてこの世界で不思議な事がひとつある。

「だーだーうーぶー」

「あらあらけんちゃんサッカーが見たいのぉ？」

「けんちゃんも一緒に見ようよ！サッカーの試合!!」

「まゆ。あまり大きな声を出すとけんちゃんびっくりしちゃうでしょ？」

ロリロリしい見た目の元気ハツラツ女の子は自分の姉の田中真弓である。ぱっちりお目目に透き通った声、将来は間違えなくべっぴんさんである。

『ストライク!!サンバァ!!!』

『決まったァァ!!ブラジル代表今年のW杯も優勝を勝ち取りましたぁぁ!!』

「ママ！今のシュート凄いよ!!」

「まゆは本当にサッカーが好きね。」

「まゆ将来はね！サッカー選手になる!!」

「うーうーだぁー！」

「けんちゃんも応援してくれるの？」
　もちろんだよぉ？（ネットリスマイル）おっと失礼。話を戻そう今のブラジル代表選手のシュートを見てもらえればわかる通りこの世界には必殺技が存在する。それが意味する事はつまり…
　イナズマイレブンの超次元な世界観ですね。サッカーで校舎破壊だったり、サッカーで世界滅亡だったり。が繰り広げられる超次元な世界観。前世を振り返ってイナズマイレブンは超人気サッカー作品である。ゲームからアニメ、劇場版まで展開し、幅広い層を魅了した伝説の作品。今の年代が分からないとこではあるが自衛手段としてサッカーを身につける必要があるだろう（感覚麻痺）では超次元サッカーをプレイするに欠かさない事はなんだ…そう必殺技である。そして必殺技は己の気をイメージで定着させ解き放つと言うなんともドラゴンボール感の強い脳筋システムである。これはサッカーであってサッカーではない、爆炎やペンギンが飛び交い神の手が出現するし相手の腹をボール越しに蹴りあげ顔面をボールで破壊する。血で血を洗う狂気…おっと失礼競技である。ファンタジーはすぐそこにあるのだ、誰もが1度は夢想したファイアトルネードにエターナルブリザード、果ては皇帝ペンギンからエクスカリバーまで厨二心を刺激する技のオンパレードが自分でも打てるかもしれない…やるしかないしやるっきゃない！ゲームではモブキャラだって必殺技を使うしなんなら栗松だって使う。俺にできない道理はないだろう？そうと決まれば今できる事でやる事はひとつ。ＴＰの概念があるかは謎だがドラゴンボールでは瞑想で気を増やしていた。やってみる価値しかないだろう？

「マァァァァ!!!!」
　ママァ!!オムツかえてー!!

　月日がたって健太君３歳に突入しました。はいみんな拍手ー！３歳で既にサッカーボールを蹴り始めている僕は間違いなく天才である。（ドヤ顔）

「けんたんまたしゃっかー？」
　呂律の回ってない声でお隣のフェンス越しにこちらを見る少女が1人、名を蓮馬小百合と言う。
「だってさっかーってやっててあきないだろ？」
「ちゅまんないよーおままごとしおー？」
「わかったよすこしまってて」
　フッサッカーの良さが分からんとはな…まぁ自分もサッカーはあまり好きな方ではないけども。前世がうだつの上がらないパンピーだったこともありウェイな集団スポーツとは点で無縁な生活を送ってきたのだ。そんな自分がサッカーなんて続けれるわーけがない。ではなぜこんな舌っ足らずのクソガキの歳からぷに足ドリブルを決め込んでいるのかと言うと。それは必殺シュートによるものが大きいのです。サッカーは自衛手段である。怖いお兄さんにはファイアトルネードを生意気ないじめっ子にはグラディウスアーチをってね。かっけーもんはかっけーんだからとにかく体が出来上がるまで基礎を作ってるのである。
　蓮馬さんと井戸端会議を繰り広げているうちのマミーにボールを預け、マイエンジェルこと小百合ちゃんの元へと駆けつける。
「けんたんわーおとおさんやくねー。わたちがおかあしゃんやくねー。」
「わかったよ」
　僕のサッカー人生はまだ始まったばかりなのだ。

紅蓮

どーも皆さんお元気ですか？みんなのアイドル田中健太です。なんとあれから2年経ちました…ん？早い？ひたすらボールに慣れて拙いシュートしてる過程なんて誰も興味ないやろ。まぁそんな事はさておきけんちゃん5歳ですよ5歳！春日部の台風こと野原しんのすけと同年代。これが意味することは分かりますか？

「ファイア…トルネード!!!!」（スカッ）

そう！必殺技の特訓である!!（顔真っ赤）

ゴホン!!イメージで1番定着しやすく現実にも干渉を起こして打ちやすいは満場一致でファイアトルネードではないだろうか？（自論）と言うことでだいぶ前から練習してる必殺技第1号ことファイアトルネードさん。これがなかなかにムズいのだ、河川敷の橋の柱相手に何ヶ月もファイアトルネード（長いからFTな）を打ち込んでるがボールが火を帯びる気配は一向にない。FTの試し打ちが済んだらゲーム版でキックを上げる特訓方法の壁にうって跳ね返ってきたボールを更に打ち込むと言う脳筋トレーニングを行う。これが中々に効いているのか訓練始めたてと明らかに壁の跳ね返りと音がダンチであるのだ。キック力は足りてるはずだしジャンプも気を足に巡らせて飛んでるから足りてる筈ではあるのだが…苦悩は続く一方である。

「けんちゃーん！おべんと持ってきたよー」

「ねぇさん！お昼には帰ったのに」

「にひひ可愛い弟が頑張ってるんだからおねえちゃんが励ましてやろーってね」

はい可愛い。バスケット片手に土手を下ってくる黒髪のべっぴんさんこと田中真弓（8歳）である。サッカー選手の夢は衰える事を知らず地元のサッカークラブでエースの名を欲しいがままにしているじゃじゃ馬である。そしてなんとこの姉、FT習得済みである…血反吐よろしいか自分。遡ること3ヶ月程前である、河川敷でいつもの様に必殺技特訓していた所クラブ帰りの姉に見つかりアドバイスがて

ら特訓を見てもらうことになったのだ。その時姉がＦＴに興味を示し原理を説明。
『であるから足に気合いを貯めて炎のイメージを浮かべて勢いのまま回転…』
『がぁーー小難しいなぁ！シュバババババっていってシュゴーでいいじゃん！』
『そんな単純な話じゃ…』
『貸して！』
　僕から強引にボールを奪って河川敷のゴールに向かって走り始めるねぇさん
　そんな擬音だらけのもので必殺技を打てるのは遠藤の血筋位なもんで…
『ファイアァァァトルネーーーーードォォ！
　紅蓮を纏い河川敷のゴールに突き進む閃光。それはまさに僕が夢見て空想を掲げ目標としてる現象だった。
『えぇ…』（悲しみ）

　といった感じである。
　天才と凡人の差ですかぁ!!これがぁ！（絶望）
　ゴホン!!まぁそれはさておきＦＴを１発で発言させられて僕もう困惑である。
「ねぇさん昨日の試合でＦＴを打ったみたいじゃないか」
「ん？あぁあのシュートね。アレほんとに凄いわね！おねぇちゃんあれでハットトリックしちゃってチームから胴上げされちゃったの！」
　ドヤ顔かますねぇさんも素敵です。みなさんこんなに僕がねぇさんを溺愛してるのになぜねぇさんの試合に着いて疑問形なのか不思議ですよね？理由は単純、その日も特訓に明け暮れてたからだよ（血涙）ＦＴの着想があと少しで掴めそうだから休憩時間だっておしいんだよ。だからねぇさんに見に行かない趣旨を話してビデオで家でゆっくり見る事に決めたんだ。実の所今こうしてサンドイッチを摘んでる間にも足はボールを蹴りたくてうずうずしてるのだ。

「ねぇさんお昼ありがとね家に帰る手間が省けたよ。」
「かぁさんから伝言ね！サッカーも程々にすふことと5時までには帰ってくることって！」
「いつも通りって事ね！ありがとねー！」
ねぇさんはバスケットの片付けをして土手を駆け上がっていく。
さて、練習再開と洒落こみますか…

お昼を食べてから数時間時刻は4：00を過ぎた。ねぇさんと別れた後もひたすらシュート練習とFTの特訓に明け暮れた。空高く飛びただ蹴りつけるシュートになる度に苦い顔をした。炎が足から出たもののボールに纏ってくれない。シーンが何度もあった。蹴って蹴って蹴って蹴って蹴って。足が棒になるまで極める。もうそろそろ今日が終わる、空はオレンジ色に染まりだした、カラスも帰宅を告げてくる。しかしあと少し…あと少しなのだ今日出来そうなんだ。ここで作らなきゃあとにズルズル引きずっていく未来しか見えない!!
足に気を込めて天高く玉を蹴りあげる。それと同時に気を足に纏わせて発火。ここの発火が出来るかどうかが問題なのだ。
世界が酷くゆっくり動いているそよぐ風が、せせらぐ川が、帰宅する親子に、鳴き喚く鳥。そして紅く赤く緋く燃ゆる巨大な夕日。
役者は揃った。
「ファイア…」
天高く飛び立ち回転足が僅かに熱を帯びているのが疲弊した身でも感じられる。
「トルネードォォォォォ!!」
射殺さんばかり叫びがボールに呼応する。ボールは物理法則無視するが如く、くの字に曲がる
ボールは紅蓮を纏いゴールネットをはち切れんばかりに突き刺し数秒のネットとの小競り合いの末制止する。
「やった…完成した…はっははははっ…うっ…くぅ…いやっ

たぁぁぁぁぁぁ!!!!」

目尻に涙が浮かぶのが感じられる。ここまでの数ヶ月良く頑張った!!自分が偉いぞ!!

サッカー界と言う水面からしたほんの小さな波紋だが田中健太と言う平凡でちんけな少年からしたら今までの努力を全て肯定してるくれる大きな飛沫に変わる。

超次元入門を果たした1人の少年の雄叫びが小さな街にしばらく響いたと言う。

安寧と平穏

どーもＦＴを若干５歳ながらにして発動する事に成功した田中健太と申します。燃ゆる夕日をバックに魂のＦＴを決めた日が先日のように感じるよ…まぁまだ3日と経って居ないんですけどね？

それはともかく。場所は何時もの河川敷、行っているのはフィジカルトレーニングである。必殺技はいいのかって？正直炎を巻き上がらせてリアルファイアーで相手を焼き殺すファイアトルネード先輩の発現に成功してしまったからその他の必殺技も似たような感じで習得可能なんだよね。グラディウスアーチとかも気の総量の問題で４本ぐらいしか展開出来ないが放つことはできるし。流星ブレードだって、やろうと思えば出来そうなのだ。それこそ、気の総量諸々度外視して放つことの出来なさそうなのなんてグングニルとか位になってきてしまうだろう。だから先ず何よりも優先して行わねばならぬ物は前線突っ切ってシュートを決めれるだけのフィジカルに尽きるだろう？

と言う事でイナイレ名物のタイヤ特訓と現在進行形で取り組んでいるのである。

朝から夕方までタイヤを引きずりながらドリブル。夜からは庭に出て縄跳びで駆け足飛びをして体力作り…完璧だ。

完璧過ぎてヨダレが出てきそうだ…そういったフィジカルトレーニングの合間で感覚が鈍らない用に必殺技の練習をしてればあっという間に1年である。

保育園はどーしたって？そんなものは行っていない。ガキ共と戯れている暇があるのならトレーニングに時間を割きたいのだ。さてそんな僕も気づけば小学1年生。ピカピカランドセルを担ぎながら隣の家の小百合ちゃんとお手手繋いで登校中である。

ああ^～ぷにぷにのお手手が合法的に繋げるってサイコー!!っと我を忘れかけて居たな。

「けんたんはほいくえんにいってないからわたちが沢山友達しょーかいしたげるね！」

「楽しみだなぁ…でも僕は小百合ちゃんと仲良く出来れば満足かな」
「えへへぇがっこうたのしみだなぁ」
「ほんとうに…ね」
　ああー^ ロリっ子の純粋な心で心が洗われるんじゃー。ほんとうにこの子天使過ぎない？マジヤバでちゃけパネェんですが？小百合ちゃんは今も指折りで友達の名前を羅列している。そんな姿を見てニマニマが止まらない自分…
「2人ともしっかり着いてこれてる？」
「ねぇさん大丈夫だよ。それよりねぇさんも前を気をつけないと…」
　こちらを心配しすぎて前方不注意。だんだんと重心が左寄りになって近づく電柱…後はお分かりですね？
「アデッ!?」
「ほらぁ…」
　横っ面を電柱にぶち当てて蹲るドジっ子ムーブの完成である。
「ほらねぇさん大丈夫？元気だして？」
「べっべつに平気だし…」
　ちょっと涙声なのが絶妙に萌えますねぇ!!（本田圭佑並感）
「ハッハッハッドジなお前が変にお姉ちゃんぶるからだろ。ほうら学校まで目と鼻の先なのだ蹲っている暇はないぞ！」
　この豪快な笑い声の人は6年生の羽々音幸人君。我等が登校班の班長さんである。
「分かってるわよ！イーダ!!」
　お姉ちゃんはいじけて走っていってしまった。可愛い
「まったくこれではどっちが上か分かったもんじゃないな。ほら健太くんはしっかりしてるから大丈夫だろうが用心するに越した事はないからなあと少しだから頑張って歩こうか」
「はーい」
　小百合ちゃんと繋いでいる手を掲げて返事をする。何よりも至福の時間を過ごした後はクラスの発表と入学式である。
　学校の騒がしい雰囲気に木製の品々緑色の黒板。日に照らされたグラウンド。全てが懐かしくて思わず涙が浮かぶのではないかとヒ

ヤヒヤしてしまう。入学早々泣きだしたら親離れの出来ない奴だと誤解されてしまうのでなんとしてでも阻止せねば。
「はーいみなさん席につてくださーい。」
担任の登場でみんな自分の席に着き始める。そこからは先生の自己紹介と皆の自己紹介が始まる。僕の名前は田中なので真ん中ら辺である
「田中樹です！好きな事はやきゅー！好きな食べ物はやきにく！よろしく!!」
パチパチパチと小ぶりな拍手が飛び交い次は自分の番である。
「田中健太です好きな事はサッカーです。好きな食べ物はーそうですねリンゴ辺りです宜しくお願いします。」
とりあえず当たり障りのない返答だろう。自分の自己紹介の余韻に浸ってると前の樹くんがこっちを向いてニカッと笑いながら話しかけてくる。
「健太よろしくな！俺は樹ってんだ！小学校の友達1号はお前な!!」
「あっあぁよろしく樹。」
コミュ力たっかぁ!?不意打ち過ぎてビビるんだけど!?
そんなこんなで学校も終わり班長さん達と一緒に家に帰る。
「ただいまーーーかあさんごはーーん」
ねぇさんが靴を脱ぎ捨てドタドタとリビングまで駆け抜ける
「ねぇさん靴ぐらい揃えようよ…かあさん帰ったよー」
ねぇさんの落ち着きの無さは最早短所では無く長所と言っても過言でもないだろう。2人分の壁掛けの靴置きに揃えて置いてリビングに上がる。鼻溝を擽るいい匂いが脳を刺激する。入学式から帰ってお昼の準備をしていた母さんがおっとりスマイルで出迎えてくれる。
「あら2人ともおかえりー学校どうだった？」
「たの…」「たのしかったーーー！新しいクラスでねみっちゃんやたけちとまた同じクラスだったんだぁ!!」
今日も田中家の台風は元気ハツラツである。

時は変わって何事も無く数日後。今僕は若草茂るサッカーグランドの中心でサッカーに勤しんでいる。参観席には送迎担当の父さんが見に来てくれている。

今日は休みだって言ったから送迎を買って出てくれたのだ。

「それじゃあ君がどれだけ出来るか見せてもらおうか…さぁおじさんにシュートを打ってきてご覧？」

「それでは遠慮なく」

ほんとうに遠慮なく活かして貰いますわ。

玉をつま先でけり上げボレーの容量で思いっきり蹴り飛ばす。

「唸れ…ジ・アロー!!」

玉が青色のオーラをまとい矢の形を形成して直進し、青色の彗星を幻視するそれは目にも止まらぬ速さでおじさんの横っ面を掠めてゴールに突き刺さる。

「すっ…凄いじゃないか田中くん…」

おじさんもといクラブのコーチがかすれ声で声を発する。

あれ？僕なにかやっちゃいました？（ドヤ顔）

◇

といった感じで親に見られてテンションぶち上がりしちゃった田中健太です。父さんがたまの休日を返上してまで僕につきそってクラブの初日に付き合ってくれるって言うから柄にもなく張り切っちゃったね！

コーチから実力十分ということで初日から元々居た子達と一緒に練習する事になったのだが。皆の僕を見る目が凄いキラ付いているのは気の所為ではないだろう。

「じゃあ先ず自己紹介から始めようか…」

「東愛小1年田中健太です。ポジションは基本どこでも出来ると思います。よろしくお願いします。」

ん？東愛とはって？稲妻町じゃないのかって？もちろん僕が住んでるのは東京ではない。ここは愛知県の東側に位置する場所だ。前世と違い東、西、中で分けられているが間違っても北東京出身では無

い。じゃあ河川敷はどうだって？あんなん何処にでもあるでしょー
にある程度の敷地にグラウンド橋の柱。まぁそんな事は些事でしか
ない。
「じゃあ田中くんは二軍の練習に参加してもらおうかな。」
「分かりました。」
　二軍といっても新入生や低学年で構成された未来ある子供達の
チームである。まぁいきなり高学年のチームにいっても馴染める分
けないから妥当かね。
　そこから二軍の子達と解散時間になるまでフィジカルや模擬試合
をこなしてめいっぱい集団のサッカーを楽しんだ。
　帰りの車で夜景を見ながら今日の事を振り返る。サッカーを初め
てあまり経っていない子も多かったが皆サッカーに一生懸命になっ
てる姿が輝いて見えたやはりサッカーはみんなでやってこそその真
価を発揮するのだな。
「健太…こんな事しかしてやれなくてごめんな」
　父さんが寂しげにぽつりと漏らす。もし僕が年相応な精神せいの
持ち主なら自分達に構ってくれない父さんの事を恨んでいるかもし
れないが、僕は父さんが家族のために遅くまで働いている事をしっか
りと理解してるし家事も母さんの負荷にならないようにこっそりと
手伝ってる事を知っている。そんな父さんを責め立てるのはお門違
いも甚だしいというものだろう。
「こんな事なんかじゃないよ。こーやって僕の為に時間を作ってくれ
る父さんが僕は大好きだよ？」
「ふふっ…ありがとう。それは母さんの教えかい？」
　まぁこんなに早熟のガキンチョ1周回らずとも気持ちが悪いと思
うがそんな自分にも姉と遜色ない愛情を注いでくれてるのだ、こちら
の方が感謝したいくらいだ。
「まっさかー僕の気持ちだよ？」
「ふふっ…帰ったら母さんの料理1杯食べるような。」
「僕もお腹空いたよ。」
　田中家の日常はゆったりと進む。

堕ちし光明

晴れ渡る空に照り着く日差し、駆け抜ける風に走り回る少年少女。小気味の良い音と共に蹴り出されるボール。季節は春そして現在なんと新人戦の真っ只中である。

「決めろ健太!!」

チームメイトから渾身のパスが送られてくるので、それを見越して貯めておいた気をボレーの要領でノーモーションで解き放つ。

「ＯＫ!!キャプテン!ジ　・　ア　ロ　ー!　!!」

ボールは青く真っ直ぐな矢となってゴールに突き進む

「これ以上!点はやれな…グッうわぁぁぁぁ!」

もちろん無手で僕の必殺シュートを止められる訳もなく呆気なくゴールに突き刺さり、同時に試合の終わりを告げる笛の音がコートに響き渡る。スコアボードは４：２僕たちの完勝である。

「決まったァァァ!!今季の東愛地区大会小学生の部を制したのは日ノ元少年サッカーチームだぁ!!」

熱い実況と共に僕たちのチームの勝利が決定したことをつげれる。どうも公式戦にていまの所負け無しの天才ストライカーこと小学５年生田中健太といいます（キメ顔）。

試合を終えてベンチに戻っていくと可愛い天使がクーラーボックスを担いで冷水を手渡してくれる。

「けんちゃんお疲れ様、はいこれお水。」

はぁい可愛い。（ねっとり）

「ありがとう小百合」

ご存知、蓮馬小百合（１１歳）年相応の愛らしい少女に成長を果たしたｍｙ幼なじみである。この世に天使は存在するのだ、自分の姉と彼女がそれに該当する。我等が日ノ元で３年間マネージャーを勤めているボランティアさん、後ろで結んだ髪がふわふわで愛くるしい。

「やっぱお前やべーわ健太。小さい東愛知地区だけどはいえあんま強くなかった俺たちが優勝だぜ?とんでもねぇよ。」

この人は日ノ元のキャプテンをしている６年の先輩だ。そう…僕

はなんと1年の頃から入ってるここ日ノ元サッカーチームのスタメンを任せれている、ポジションは監督の推薦でリベロを任されている、攻めはみんなに合わせて。守りは徹底してって感じである。うちのチームのフォーメーションがそもそも5―3―2なのでそういった動きがしやすいのも最大の特徴である。
「大袈裟ですよキャプテン。それにこんなにのびのびとサッカーが出来るのはキャプテン達のパス回しだったりブロックだったりのおかげで僕だけの力じゃありませんよ。誇るべきはチームの皆ですよ。」
「達者なお口だなぁコノコノッ」
　チームメイトに茶化されながら今日の試合のミーティングを終えて行く、これで今期の公式戦はもう終わりでまた今度
　僕は周りと違い早めに努力する機会が与えられたからその優位性をサッカーに全振りしたつもりではあるが。周りからそれを僻み嫉みとしてぶつけられなかったのは恵まれたのだと思う。
　なぜこんな話をって？ほら原作にもいるじゃん周りからの嫉みで才能を腐らせてしまっていた悲しき天才。宇都宮虎丸君が。彼もちょうどこれくらいからあぁいった周りを引き立てるサッカーをするようになったぽいから僕はだいぶチームに恵まれたなぁって
「けんちゃん今日はお疲れ様…その…明日って予定ってあるかな？…」
　２人で駅から家に帰っていると唐突に小百合ちゃんがモジモジしながら話題を振ってくる。デートのお誘いかな？いや…童貞こじらせるは宜しく無いと前世の経験でわかっているだろう？
「明日？自主練以外やる事ないけど…」
　玉を蹴り続けてないと死ぬ呪いにかかっているんでね私ボールは友達？甘えるなボールは心臓だ。
「ほんとう!?それじゃあ明日映画でも見に行きましょ！約束ね！」
　おっおぉめちゃくちゃ笑顔でまくし立てられてしまったが答えはもちろん。
「うんいいよ。見る内容は任せてもいいかい？」
　小百合ちゃんとデートが出来るのなら僕は喜んでサッカーを諦め

よう、こんな玉蹴り天使の前じゃ塵に等しい。心臓はどうしたって？止まっても天使が救済を下さるだろう？何を言っているんだい？
「うん！まかせて！」
発展途上を張ってえっへんする小百合ちゃんも素敵です（ニチャア）
そんなこんなで楽しくだべって帰っていればあっという間に家の前である。小百合ちゃんと手短に別れて家に入る。
「ただいまー」
「おーかえり!!健太！今日の試合どーだったの!?早く話して!!」
「落ち着きなよねぇさん。夕飯の時にでも…ね？」
「そーよまゆけんちゃんだって疲れてるんだから…余り困らせちゃだめよ。」
ねぇさんは中学生になっても変わらずである。
そうなんとねぇさんはしっかりと中学生になっている。僕の３個上だから１４歳中学２年である。そしてねぇさんはサッカー部所属…ここから導きだされる答えはたった一つ。来月にはフットボールフロンティア通称ＦＦの地区予選が開始されるのであーーる!!
「ブゥー2人ともケチんぼ！いいじゃん話くらい！」
田中家は今日も平和です。
◇
春の新人戦からだいぶたって夏直前…今日はねぇさんのＦＦの試合があるので小百合ちゃんと学校を休んでこっそり観戦に行ってしまおうと言う手筈であったのだが…。
「もう諦めようけんちゃん…」
小百合ちゃんが諭す用に言ってくる。
「諦めなんないよぉーくっそぉねぇさんの雄姿をリアタイで見たかったァ」
「カッカッカッ仕方ないもんは仕方ないだろ健太。」
褐色の犬歯が眩しい1年からの付き合いの樹が茶化してくる、悔しさだけが残るばかりである。
「そう言ってやんなって樹。傷口に塩だろ」

同じ日ノ元出身の亀戸がボソリと呟いた。何故こんなことになっているのかと言うと、事は3日程前まで遡ることになる。
『けんちゃん…ママは非常に悲しいです。』
疼く両足にかぁさんの冷たい眼差し、今にも泣きそうに潤む小百合ちゃん、咎める蓮馬ママ。僕たちの拙い計画は一瞬で瓦解してしまった瞬間であった。
『素直に言ってくれれば協力もしてあげようと思って居たのに…あろう事かズル休みを決行しようだなんて…それも親を騙してこっそりと。』
かぁさんの糸目がうっすらと開かれている、怖すぎでしょこの人。息子に嘘をつかれて騙されかけたのがそんなにあれだったか？
『母さんなにもそこまでしなくてもいいんじゃないかい？』
父さんがイケメンな助け舟を出してくれる。あんたやっぱり最高だよ、神はここに居たのだよ。
『お黙り！宗次郎さん！この1回が家族間に亀裂を産んでしまうんですのよ!?』
かぁさんの素の口調がお嬢様地味ているのが少し気になるな。父さんに惚気覚悟で聞いてみるのもありだな。
『そうは言うけども…』
『けんちゃんにはしばらくサッカー禁止令を執行します!!。クラブ活動以外の一切のボールへの接触を禁止します!!。異論は決して認めません!!』
母さんはぷりぷりしながら家に入ってしまう。
◇
といった事があり今じゃ家に軟禁状態である。もちろん縄跳びトレーニングといったフィジカルに直結するものまで禁止されているため簡単な腕立てとかストレッチとかをこっそりとこなすしかないのだ。
「今頃ねぇさんはハットトリック決めている頃だろうかなぁ…」
ファイアトルネードかなぁ…イカロスフィストかなぁ…
「田中君少しいいかしら…」

先生から呼び出しを食らった、え?僕なんかやらかした?。
廊下に出て特別教室に通された僕に対して担任の先生は神妙な面持ちで口を開く。
「いい?落ち着いて聞いて欲しいの…」
胸の当たりが変にザワつく。
「貴方のお姉さんが…今日会場に行く際トラックに轢かれて今意識不明の重体らしいわ。」
身体は既に駆け出して居た。
◇
けんちゃんが先生に呼びたされて心配なので様子をこっそりみんなで見に行くことになりました。どうも蓮馬小百合です。
「アイツなんで呼び出されたか当てようぜ」
褐色の犬歯の眩しい男の子の田中樹君。彼とは1年の頃からずっとクラスが一緒の元気な野球少年君です。やってるスポーツは違うけど私達ととっても仲良しさんなんです。
「そーだねぇ妥当なとこだと理科のノート提出サボって石井先生からの大目玉ってとこ?」
彼はけんちゃんと同じサッカーチームに所属している亀戸勇儀君です。彼とも1年の頃からサッカーチーム繋がり縁があって今もこうして一緒にいます。
「そーだったら雑用もプラスで着くだろうから軽く手伝って貸し1作ってくやろーぜ」
「よし乗った」
二人共素直じゃないんだから…
「もう二人共そんなこと言っちゃ…」
目の前から物凄いスピードで人が駆け抜けてあっという間に通り過ぎていく。違う…今のはけんちゃんだ。物凄い焦ってたけど心配だ。
「今のは健太か!?」
「すごい形相だったけど?」
「あたし…心配だよ。追いかけてくる!」

「あっおい！小百合！クソッ」
「まて樹！僕たちまで着いていくことは出来ない。」
２人が後ろで何か揉めているけど。私は無我夢中でけんちゃんの後を追っていった。
◇
ねぇさん。ねぇさん。ねぇさん！
走って走って走って限界なんて何処吹く風と行った速度で駆け抜ける。病院までは距離があるが十分近い距離である。街の喧騒も車の風切りも視界にはなにも映らない。失念していた驕っていた、そしてなにより後悔していた。解っていた筈だ理解出来た筈だ、なぜ手を回さなかった、なぜ失念していた、なぜ何故何故なぜ。
頭の中が後悔と息苦しさで満たされる。
「ねぇさん!!!」
病院の受付で恥も外聞も知らず喚き散らす。
「たっ田中真弓のおっ弟です!!ねぇさんは！ねぇさんはどうなって!!」
「院内ではお静かにお願いします…こちらに起こしください。」
院内の一室に通されるそこには泣き崩れる母とそれを支える父が既に凄惨さを物語って居た。
「健太…」
父さんが静かに口を開く。
「ねぇさんは…ねぇさんは死んじゃうの？」
口から細い今にも消えそうな声が飛び出す。
「安心しろ命に別状は幸いにしてなかったみたいだ…だが」
やめろ…やめてくれ…僕から光を…
だがの続きは聞きたくない、しかし現実はどこまでも非常だ。
「足が動くことはもう二度とないらしい」
ガラスの砕けた音がした。目の前が白で埋め尽くされれ、腰が抜けた。
田中家の光は今日ここに閉ざされた。

黒い絵の具

ねぇさんの足が動かない、その事実は僕に重く重くのしかかる。
「脊髄を強く打ち付けて下半身不随。現代医療で何とかなるか…それすらも分からない状況だ…」
父さんが状況の説明を淡々と行う、この人だってやるせない筈だがその声は酷く冷えきって居る。
ねぇさんはまだ目覚めない。
まだ死んでしまった訳では無い、しかし目が覚めたねぇさんがこの現実を知った時の反応がすでに幻視できるまでに読めてしまう。
「僕…僕は…僕」
「健太…後のことはプロに任せよう…父さん達ができる事は…もう残されていない。家に…帰ろう。」
「父さん先に帰ってくれて構わないよ…僕は後で帰る…後で、必ず」
「そうか…分かった。ほら美智子もう行こう、ここに居ても真弓が目覚める事は無い。」
泣いている母さんを諭すように父さん達が病院を後にする。
ねぇさんのベットの横の椅子に腰掛けて自分の不甲斐なさをひたすら責め続ける。
あぁ自分は愚かだ、浮かれて居たのだ。転生者という大きなアドバンテージに。実に滑稽だ、ねぇさんのサッカーの才能は凄まじいと解っていた筈だ。であるのならばあの男が放っておく訳が無い。
今回の件には心当たりがありすぎてしまっている。影山零治イナズマイレブンにおける悪役的ポジション。サッカーを憎み歪んだ情熱を注いだ、イナズマイレブンの初代におけるラスボス的ポジション。事前に防ぐ事なんて不可能なのかも知れない。しかしねぇさんは僕のファイアトルネードを見るまで必殺技なんて触れてこなかった、あの日あの場所で僕がねぇさんを怪我させる事に加担したのは間違いなく事実だ、サッカーに罪は無い。そんなことは理解している、しかし僕がサッカーを始めなければそういった考えに歯止めは聞かない。放っておくとどんどん出てくる、必殺技の習得なんて目指さな

ければ、ねぇさんの手を借りてアドバイスを求めなければ、ねぇさんのサッカーを否定しづつけていれば…。後悔後先に立たずとは良く言ったものだ。
「やる事なんてたった一つだけだよね…ねぇさん」
起こってしまった事にとやかく言っても変えられない、もう割り切るしかないのだ。現実改変なんて大それた事は僕には出来ない。
きっとねぇさんはこれからやる僕の行いを酷く咎めるだろう。これは僕のエゴだ、ねぇさんを理由にする訳には行かない彼女は善人だ。間違いなく、自信を犠牲に他者を助ける現代日本からしたら酷く珍しい…だから、だからこそ僕の僕だけの僕のによる僕のためだけの行動…
「復讐だよ…帝国学園…いや、影山零治。」
潰す…徹底的に完膚なきまでに。
サッカーで売られた喧嘩はサッカーで買って返す。貴様が作り上げた史上の存在を地に叩き伏せ、再起不能に追い込む、邪魔するものも障害も打ち砕く。影山の最高傑作である鬼道有人及び奴の息が掛かった世宇子中を粉々に磨り潰し、誰に喧嘩売ったか解らせてやるのだ。
◇
走るけんちゃんを追って着いた先は病院でした。けんちゃんの足の速さには脱帽です、途中なんどか息切れ起こしちゃってとっくに見失って居ましたが道行く人に必死の形相で走り去っていく少年を尋ねれば簡単に目的地までたどり着けました。
息もキレキレで病院に着くと病院側からけんちゃんが歩いて来るのが見て取れました。
「けんちゃん…ハァハァ…急にどうしちゃったの？」
「小百合…ごめんね。しばらく1人にさせてくれ…事情は追追必ず話すから。」
私は常識知らずの図々しい女なのかも知れません…でも今ここでけんちゃんを止めなきゃ。
「だめだよけんちゃん…ほっとけないよ…事情なんて話さなくてもい

い、けんちゃん凄く…辛そうな顔してるもん。」
　けんちゃんの表情が悲しみで歪んだ顔では無くもっともっと酷く焦燥とした、とにかく良くない顔をしているんです。そんなけんちゃん放ってはおけません。
「小百合ちゃん…頼む…僕は君を突き放したくないし汚い言葉を浴びせたくない。今の僕じゃあ君に何をしでかすか分かったもんじゃない…だから、だから。」
　けんちゃんが私と目を合わせようとしません、私もおバカさんではないので事の端末はある程度察せられます。
「私はけんちゃんにどんなことをされても、けんちゃんがどんなに悪い子さんになっちゃったとしてもけんちゃんの味方で居たいと思っています。けんちゃんが辛いならその辛さを分け合いたいしけんちゃんが嬉しいならその喜びを分かち合いたい。けんちゃんが私を嫌いだと言っても私はけんちゃんを嫌いにはなれません。だから…えーとそのー」
　自分でも何を言ってるのか分からなくなって来ました。
「とりあえず河川敷までいきませんか？」
　疲弊しきったけんちゃんの手を引いて自分本意の考えで河川敷まで向かいました。
　私はえらくめんどくさい女です、自覚ありです。
◇
　場所は変わって河川敷、僕は小百合ちゃんにポツポツと赦しを乞う様に断片的に話していく。
　自分がどんな人間なのか、自分がねぇさんにしでかした事とか。小百合ちゃんに慕われるような人物ではない事とか。自分がこれから行おうとしてる事とか。小百合ちゃんは相槌を打ちながらただただ僕の話を聞いていてくれた。
　そして聞いた上でふと小百合ちゃんが口を開いた。
「けんちゃんは今とっても悩んでるのは見て取れます。私はけんちゃんが何を苦しんでいるのか…きっとけんちゃんにしか解らない辛さばっかりだと思うし。気軽に辛さを取っ払うとか出来ないし言えま

せん。でも私もけんちゃんと一緒に悩めるし、けんちゃんと一緒に考えれるから…また今日みたいに私を頼ってほしいし話てほしい…復讐とか贖罪とか難しくて良く分からないし何をしようとしているかなんて考えも付かないけど。味方であることだけは出来るから…世界中の誰がけんちゃんの敵に回っても私だけは絶対にけんちゃんの味方で居続けるからね。」

酷く歪んだ愛情が、僕の心を満たして行く。純白の天使を穢し地に落とすのは何時だって醜く悍ましい悪魔だ。僕はきっと彼女を穢し汚すだろう。その優しさは僕なんかに振る舞われていい代物では決してない。

「わっ!?…けんちゃん?…」

「あり…がとう…グッ…ありがと…う」

しかし差し伸べられた林檎を捨てられる程僕は強くはあれない。

僕が突然抱きついても彼女は僕を振りほどく事無く受け止めて優しく撫でてくれる。この優しさは僕の歪んだ心を愛で満たす。

あぁ…堕ちてしまえよ…あらゆるものよ。

想いは重なるほどに重くなる

小百合ちゃんに手を引かれながら夕焼けの元家に帰る。
帰り道ではお互いに一言も話すことが無かったが妙な心地良さと安心感で気まずいとは思わなかった。
「けんちゃんお家に着いたけど入れそう。」
「あぁ…ごめんね小百合ちゃんもう大丈夫だよ。今日はごめんね、色々と…凄く助かったよ。」
心配そうな声で小百合ちゃんが呼びかけてくるが。流石に家の中まで着いてきて貰う訳には行かないのでここでお別れだ。
「明日はどーするの？また休んじゃう？」
「魅力的な提案だけど流石に行くよ、先生にも謝らないと行けないし。」
さぼった事とかの謝罪とかもろもろの謝罪もあるし…ね。
「そう…分かったそれじゃあまた明日ね」
「うんまた明日」
家の鍵を開けて家に入る。
「ただいまー」
「おかえり健太。少しは落ち着いたかい？」
「父さんの方こそ…取り乱す余裕も無さそうだったけど大丈夫なの？」
あの凄惨な現場において息子に淡々と状況説明していたのだ。本当なら父さんも相当やるせなかった筈だが良くあの場であれだけ平静を取り繕えたものだ、主演男優賞もビックリである。
「ハハッ父さんは薄情者でね。実の所余りそういった緩徐は出なかったんだ…生きててくれてよかったって言うのが真っ先だったかな？」
この人は本当に…
「嘘だね、僕は父さんがそこまでじゃないってちゃんと理解してるよ。」
「笑えない冗談だったかい？」
自分の感情を二の次にして疲弊したこの場を和まそうとしたが絡

まわりしてしまってる。普段ならもっと口も回る筈だが、娘のあの惨状を前にして正気でいろという方が難しいのだ。
「この場に置いては…全くね」
◇
ねぇさんの事故から数週間が経過した。色々とあったがざっくりと説明させてもらおう。
先ずねぇさんは数日で目を覚ました。最初は酷く落ち込んでいたが、足が動く可能性が０では無いと聞いて何時もの調子にすぐ戻った、いや無理矢理戻したと言った方が正しいだろう。今は彼女の笑顔が酷く痛々しく見える。
そしてもうひとつ…
◇
『サッカーチームを辞めるだって!?』
『悪いな亀戸、もうお前達に付き合ってはやれないんだ。』
冷たく振り払うように言い放つ。
『どういう事だ…説明しろよ…健太ァ!!』
『おい亀戸!やめるんだ。』
亀戸が僕の胸倉を掴んで抗議して来たところをキャプテンが抑え込む。
『本当にいいのか?健太…言わせて貰うがそれはお前の本心には決して思えない…なぜそんな考えに至ったのか話してくれないか?チームだろ俺たちは』
『聞こえなかったのか?随分とおちゃらけた頭をしているみたいだな。わかりやすい様に教えてやるよ、もうお前達みたいな雑魚とはサッカーなんて出来ない。』
『どうしても考えを改めるつもりはないのか…』
『そうまでして引き止めたいのか?ククッ…分かったよ、君たちの想いは伝わったよ、すぅごっく…ね…それじゃあ今ここにいるスタンディングメンバー11人対俺1人で…』
『サ　ッ　カ　ー…や　ろ　う　や　』
◇

といった事があって僕は日ノ元を去った。理由？彼等のような楽しむサッカーとは決別する為だ…僕の復讐は僕で作り上げる。利用出来るものは利用するが彼等を巻き込む訳には決して行かない…だから冷たくしたし心にも無いことを言ってのけた。全ては復讐の為に全ては僕自身の為に。

◈

俺、亀戸平助はしばらく学校に来ていない友人の机を授業中だってのにじっと見つめていた。なぜあいつが学校に来ていないかは蓮馬に聞いてみても知らない、分からないの1点バリだった。あいつは…本当になんであぁなっちまったのか…大方は察しが着くが。

事は数週間前…結構な騒ぎがあった事件…東愛少女轢き逃げ事件。中学サッカーの祭典、フットボールフロンティア（通称ＦＦ）杯準決勝の出来事だった。当時何十年ぶりかにＦＦ出場を果たした東愛中学校そのエースストライカーの田中真弓さんが意識不明の重体で病院に搬送された事件。あの日健太が学校を飛び出した理由も直ぐに合致が行ったというものだ。そして健太はその数日後に俺らのクラブに来て突然チームを辞めると言ってのけた。もちろんみんな抗議したさ、何故だ、どうしてさと。しかし奴は俺達のような雑魚とはサッカーが出来ないと冷徹にも言い放ったのだ。皆嘘だって直ぐに気づいたさ、あいつの顔が悲しそうに歪んでいたからな、逆に気づけなかったら友人失格もいいとこだぜ。いやそんなことはいいんだ、その後健太が引き止めたくば今からやるミニゲームで勝利しろと言って除けた。ルールは単純、１１対１の得点勝負、試合終了までに多くの点数を取った方の勝ちである。結果は火を見るより明らかのはずだった…はずだったのだが…

◈

試合開始の笛が鳴る相手は健太１人奴は強いがこっちは１１人負ける道理がない…

「そのボール貰ったァ！」

ＭＦの大野木がボールを取ろうと全身するしかし、

「あぁ…やるよ、ボール…欲しいんだろッ!!」

「ジャッジスルー2!!」
信じられない光景だった、突っ込んだ大野木が健太にボール越しで何度も蹴りあげられて吹き飛ばされてしまう。
「お前ッ!…なんて事を!!」
気づいたらFW含めて3人でボールを取りに行っていた。
「あーあー皆さん必死こいちゃって…頭冷やしたらどうっすか?」
「烈風ダッシュ」
気づいた時には空を大きく舞っていた地面に打ち付けられて視界が霞むなか辛うじて見れたのはボールを取ろうとした奴から片っ端から空に打ち上げられて、そして
「これが格の違いってやつだぞ雑魚ども!!分かったならなァ!!大人しく引き下がれってんだァ!!!」
「万物を薙ぎ倒し!全てを破壊しろ!」
健太の悲痛めいた叫びがフィールドに木霊する。健太は天高く飛び上がり唸りをあげるとやつの背中から巨人の上半身と剣のようなものが出現する。
「罪ノ!!大剣!!」
空から落ちた破壊の一撃は、逃げだしたキーパーのいないゴールに向かって真っ直ぐ飛んでいってゴールネット焼き焦がしながら数秒たってから勢いを無くして力なく地面に落ちた。
その後の展開は早い皆戦意を喪失してしまい立ち上がる事はなかった。
「ハッ結局口だけかよ。」
この時の健太の声が酷く弱々しいと言う事は決して気のせいでは無いだろう。
健太の立ち去ったフィールドはもうお通夜状態と言った感じだった。
「俺…悔しいよ…健太相手に何も出来なかった。」
誰かがポツリと呟いた。
「あいつ終始悲しそうにプレーしてやがった。あんな顔しながらやるサッカーなんてサッカーじゃねーよ。」

「俺決めたよ！今よりもっともっと強くなって東愛に行く！んで東愛サッカー部で健太と戦うんだ！」
「確かにあいつ俺らとサッカーしないって言っただけでサッカー辞めるなんて言ってねーもんな！」
　そうだあいつは1度もサッカーを辞めるなんて言っていない。そして奴は東愛に行くきが無いと言う事もこの前言っていたんだ。
「また健太と一緒にサッカーする為に…もうあいつ1人に任せっきりのチームじゃないように!!」
　キャプテンが立ち上がって手を前に差し出す。皆それにつられて手を重ね合わせて行く。掛け声なんて決まってる、やる事なんて決まってる。
「日ノ元ォ」
　キャプテンの声を皮切りにみんなの声をひとつにする。
『日ノ元ッ』
「ファイッオーーー!!」
『オーーー!!』
　俺達が健太の事を追い抜いてしまう日がそう遠くないように感じてしまう。そう思えてしまうのはえらく不思議な気分だった。

決意や誓いそれは呪い

最近に来て特訓に悩みが生まれ始めた、今の僕の力で限界を越えようと努力して玉を河川敷の柱に打ち付けたとしたらどうなる？答えは簡単…柱が倒壊してしまう。そう僕の力は既に分厚い石の柱を通常のキックで易易と破壊できてしまう程にまで上昇していた。

さてさて困ったもんだ…超次元を誇るサッカーゴールさんの力を借りるべきなのか…しかしそれじゃあボールの回収がいちいちめんどくさい…

何かいい方法は無いかと視界をさまよわせていると1本の木と放棄されたタイヤが目に映る。

これは使えるぞ。新しい強化方法を思いついた僕の顔に笑顔が浮かぶのは仕方の無いことだろう。

家から荒縄を持ってきて1番太い枝にしっかりと結び、タイヤを吊るしてしまえば立派な特訓器具の完成である。

さぁ特訓開始だ。

タイヤを動かして加速させていしき、ちょうどいい強さになったところで足で蹴りあげる!!

しかし結果は何時だって残酷だ、根元からへし折られた枝はタイヤと共に川に轟音を鳴らしながら着水、ダイナック不法投棄の完成である。

結局あの後見て見ぬふりをしてゴールポストに玉を打ち付ける事によって疑似柱特訓が完成した、この世界のゴールは何故こんなにも頑丈なのだろう？デュランダルも真っ青な耐久値を誇るゴールに感謝しながら自主練をこなしていけば1日なんて直ぐに終わってしまう。

いつの間にか日が暮れてしまっていた、晩御飯までには必ず変える必要がある。

「けんちゃん終わった？」

何時からか河川敷の土手に腰を下ろしていた小百合ちゃんが片付けを始めた僕に声を掛けてくる。

「何時も見てるけど飽きないの？」
素朴な疑問だ。華やかな必殺技の特訓をしてる訳でも相手を軽やかに抜き去るドリブルでもない。ただ力の込めたボールを轟音と共に蹴り続けるだけのルーティンワーク、3分見続けられたらいい方の特訓内容である。
「ぜーんぜん？だって頑張ってるけんちゃん見てるだけで退屈なんて感じないもん、本当は学校サボってでも見ていたいくらいだけど。」
「それに関しては何も言えないかな。」
学校サボってサッカーしてるんだからサボりを推奨も否定も出来ない。本音は小百合ちゃんには全うに生活していてほしいと思ってしまう、こんな僕の事なんか忘れて。
小百合ちゃんはクスクスと喉を鳴らして手を前に突き出してくる。
「それじゃあ帰ろ？」
僕は躊躇いもなくその手を取って2人で帰路に着き始めるのだった。

「ただいま母さん。」
「おかえり。けんちゃん」
晩御飯前にはしっかりと帰れたらしく、玄関をくぐって直ぐにいい匂いが体を包み込む。
母さんは僕が学校をサボっているのを当然知っているだろうし、何をする為にサボってのかも理解してる筈である。しかしそれに関して口を出す事は絶対にしてこない、本当はサッカーなんてもう聞きたくもない筈なのに。
手洗いとうがいを終えて晩御飯の軽い手伝いをして2人で食卓に着く。
「いただきます」
かぁさんの手料理は凄く美味しいのだ、傷心してる時に食べたら涙が出るくらい。
「ねえさんの調子はどうだった？」
「あの子まだサッカーを諦めるつもりが無いみたいでね…あんな事に

なっちゃっても足が動くって動かしてみせるって言って聞かないのよ…全くあの強情さは間違いなくパパに似たのね、間違いないわ」
「確実にかぁさんだと思うなぁ僕　」
　やると決めたら梃子でも動かない静かな情熱は間違いなくかぁさんの血である。父さんはどちらかと言うと意思は硬いが目的の為なら手段は選ばない派である。
「あらぁけんちゃんもお姉ちゃんみたいなとこ多いわよ？」
「ゲェ、あの熱血バカと一緒にされちゃあ僕もそこまでだね。」
　くすくすとのどかな空気が食卓を覆うが痛々しさが消える事は無い。
◈
　僕の就寝はだいぶ早い、6時にご飯を済ませてしまったらお風呂と軽い勉強を済ませて9時には寝てしまう。しかし今日は普段起きない時間に目を覚ましてしまう。
　枕元の時計を見やると時刻はまだ午前の2時半を移している。階下が少し騒がしい、寝惚けた頭と眼で何を血迷ったか様子を見るという結論に至ってしまう。
『貴方は何!?真弓の足を…諦めろって!?』
『美智子声を抑えろ健太が起きてしまうだろ？』
『ッ!?でも、だってそれじゃあ…』
『仕方ない…仕方ないんだ。あんな金額とても僕達には…』
『なら…なら！私も一緒に働けばッ！』
　ギシギシと、なる階段それを1段降りる事に脳が覚醒していく。
「君は体が弱い…そんな事したら持病に影響が。」
「なりふり構ってられるような状況じゃないでしょう。今、私の身体なんて心配できる状況じゃ。」
「それで君が倒れてしまったら！元も子も無いだろう!?頼む…もっと自分を大切に…」
「父さん…母さん…騒がしいよ」
　2人がすごい形相でこちらに振り向く、かぁさんはまた泣いてしまったのか涙の後が着いているし父さんも心做しか窶れて見えてし

まう。
「僕…サッカー選手目指すよ。」
「何を言ってるんだい…」
「サッカー選手ってお給料沢山貰えるんだよ？知ってる？ねえさんの手術費用なんて片手間で払えるんだよ？僕ね天才だから簡単だよ」
そう自分は天才だ…天才なのだ。転生者という圧倒的スペックに加え若干５歳で必殺技を発現させ今年の春の新人戦では得点王にも輝いた。アニメでみてもゲームでみても僕より優れた選手は片手で数えられる程だろう。
亜風炉照美も豪炎寺修也も鬼道有人もエドガー・バルチナスもフィデオ・アルデナも基山ヒロトだって、円堂…守だって僕にはきっと届かない…届かせない…届いちゃ行けない。
「だから…もう…だい…じょうぶなん…だよ？」
僕はプロになる、復讐をこなしてＦＦで優勝して知名度を挙げて、何としてでも何をしてでもやりきる。
誓いは今ここにもう一度建てた。
やることは分かった、もうこの人達に無理をさせる訳には行かない。
◇
自分は父親失格だ。
妙に大人びている子供だった、手はかからないが自分を頼ってくれて子供らしい側面も十分にあるがその実子供らしさなんて欠片も持ち合わせて居ない少し不気味な自分の息子。
それが僕の、田中健太に対する印象の全てだった。
「私達…子供にこんなになるまで背負わせて…何やってるんでしょうね。」
妻が健太を膝に乗せて頭を撫でながら、か細く今にも消え入ってしまいそうな音を出す。プロになる、息子が泣きながら言葉を紡いだ先に出したものだ。それは健太が僕や美智子が将来を聞いた時に困ったように受け流す様に用意していた何時もの答えだ。
しかし今日、あの表情から発せられた言葉はそんなその場しのぎの

ものでは決して無い。もっと誓いにいや自らを縛り付ける呪いじみた執念の篭った言葉だった。
「健太はプロになると言っていた。」
「私はもう嫌です、サッカーなんていう玉蹴りで子供達を危険な目に合わせるのなんて。」
「僕だって反対さ、でも今健太からサッカーを取り上げる行為、それそのものが健太にどう影響を及ぼすか計り知れない。」
　健太は今、酷く不安定だ。姉が事故にあったのは自分のせいだとなぜか責め立てている風に見えて仕方がない。健太が学校をサボって河川敷でサッカーをやっているのも知っている。狂った様にボールを蹴り続けて怒りに燃えて居るのだと。
「今は信じよう…この子をもうそれしか僕達にはないんだ。」
「どうして…私達がこんな目に会わなくちゃ行けないの？」
　その問いかけに対して僕はただ、震える妻に寄り添う事しか出来なかった。

夢の始まり～目指せＦＦ目指せ全国制覇～
全てが動き出す

カーテンから差し込む陽光、階下から香る味噌の匂い、鳴り響く電波時計、カレンダーには4月1日の表記、壁には真新しい制服。これが意味する事はたったのひとつ。僕田中健太は不登校期を終えて今日、新たな門出を迎える。

朝の身支度を一通り終えて食卓に着く。

「おはよう母さん、それと父さん。」

父さんが朝いることが珍しくて少し変になってしまった。

「それとってなんだぁ？それとって」

「いや朝いるのが珍しいなって。」

「ハハハッまぁ偶には家族で朝食囲むのも気分転換でいいかなって…ね？」

「ほぉら2人とも呑気に話して無いでチャッチャッと食べる、朝は時間の進みが早いんだから。」

父さんと顔を合わせてクスリと笑ってみんな揃ってご飯を食べる。朝ののどかな時間はあっという間に過ぎてしまう。

「んじゃあかぁさん行ってくるね。」

「かぁさんも後で行くからね。しっかりやんなさいよ」

かぁさんの激励を受けて玄関をくぐる。朝にジャージ以外で外に出るのは実に1年振りの出来事では無かろうか。

学校まではバスで移動するのでバス停まで移動しようとすると突然視界が暗転する。

「だーれだ」

僕の心の拠り所のご登場である。しかしきっと彼女とは別の中学である筈なので途中までしか登校出来ないのが残念でならない。

「うーん誰かなぁ、分かりそうに無いかも。」

わざとシラを切って見る。

「正解はー」

視界に光が戻って、僕の幼なじみが小降りな足取りで視界に収まっていく。しかしその姿は僕の想像を絶するものだった。
「間是和(ませわ)中学新1年生、蓮馬小百合１２歳。でしたー」
彼女は僕の行く中学の女生徒用の制服に身を包んで、僕にしてやったりと言う顔で微笑んでいる。
「これから3年間宜しくね。けーんちゃん」
私立東愛知地区間是和中学校。ここ数十年でできた振興の学校、校訓は学び・助け合い・高め合う。と言うまぁありふれたものである。
普通であればここら辺の人は家から近い東愛知立日ノ元中学校通称日ノ中に進学する筈なのだ。僕は事情ありで特待生制度を利用してわざわざ家から少し離れた場所を選んだ。そしてこの事は両親以外誰にも話しては居ないはずである。
バスに乗りながらうんうんと考えていると、小百合ちゃんがくすくすと口を開く。
「どうして?って顔してるねけんちゃん。私がけんちゃんと違う学校に通うわけないじゃない、おバカさんだなぁ。私がけんちゃんの事で知らない事なんてなーんにも無いんだよ?言ったじゃない。けんちゃんの辛さを分かち合うって、その為にはけんちゃんの傍に居続けなきゃ…辛さがわかんないでしょ?だから私から離れるなんて思わせないし、考えさせない。」
あれー?この子こんなにヤンデレ属性着いてました?なんかどす黒いオーラ見えるしなんなら目のハイライトが心做しか失われてるぞ?
「ずっーと一緒だよ?けんちゃん」
小百合ちゃんは僕の右手を両手で優しく包み込んで整った顔で微笑みかけてくる。
こっこいつ!自分が可愛いと言うのことを自覚して行動してやがる!!
◈
ところ変わって間是和の体育館、現在硬っ苦しい入学式の真っ只中である。

『えーそれでは新入生挨拶。代表、田中健太。』
「はいっ！」

　我が校の特待生制度は入試成績上位５名のもののみに与えられるものである。因みにその後も生徒の模範であると同時に好成績を収め続けなければならないという結構な代物である。しかしその恩恵は大きく教科書代や学費果ては遠征費用までもが全額学校負担なのである。そして部活動や同好会にて好成績を収めれば追加で補助金も発生する。まさに至れり尽くせりの設計である。
「暖かな春の訪れと共に…」
　テンプレにも近い祝辞を読み上げていく。硬っ苦しい入学式もいよいよ終わりに近い。
「以上。新入生代表田中健太」
　祝辞を読み終えて列に戻っていく、これで終わりである。目当ては放課後の部活動見学。ようやく夢が叶うのだ中学サッカーの夢の祭典フットボールフロンティア。スタメンの心配？僕が溢れてしまうとでも思うかい？僕は転生者スペックを有してかつこの体の化け物スペックを十全にハッキリできる天才の中の天才だぞ。たかが中学生のそれも無名サッカー部の一軍如きに負けるはずが…
◇
　入学式やクラス挨拶等を一通り済ませて目当てのサッカー部見学に足を運ぶ、担任にサッカー部の練習場所と部室を聞いたら少し渋い顔をされたが場所を教えて貰えた。少し疑問や違和感があったがさして気にすることでも無いと部活練の部室に足を運ぶ。
　サッカー部の部室は平屋の４番目のドアだと言うことでノックをして人を確かめる。
「すいませーん入部希望なんですけど誰かいまっ!?」
　言いかけてた所で思いっきり。扉が開かれて後方に少し下がってしまう。
「やぁやぁ!!歓迎するよ！我がサッカー部に!!ささ！入って入って。」
　見やる内容はお世辞にも良いと言えなかった。そこそこの広さの

部室に揃ってる人はわずか3人。誇りの被ったロッカーに明らか使われて居ないサッカーボールの入った籠、寂れた壁には剥がれかけてる何時の時代かも分からないＦＦのポスター。いやまだ部員が揃ってないだけだ、自分にそう言い聞かせる。
「君は確か新入生代表を務めていた子だろ？名前は確か…」
「た…田中…健太…です。」
「そうそう田中君だよ、いやー助かる助かる。なんせ家のサッカー部の現状は見てわかる通り。」
やめろ…現実を突きつけるな。
「3人しか…部員が居ないんだ。」
最悪だ。

せっかくサッカー部に来たのにサッカーどころじゃ無かった件に着いて、どーも田中健太です。スタメン落ちとかレギュラー争いとか、先輩からの嫉妬とか諸々覚悟できたけどまさかの部員数が圧倒的に少ないとは。
「んじゃあ先ずは自己紹介から始めようか。僕は一応キャプテンを任されてる2年3組の是和新汰っていうんだ、宜しくね。ポジションはＭＦ担当かな。」
チャラ目の茶髪に軽そうな声。しかし鍛えられた体付きを有してるザッ陽キャみたいな人がこの間是和サッカー部のキャプテンか。
「2年5組、鮫田和樹。ＦＷ」
目付きが鋭く椅子に座って携帯をいじってるヤンキー風の人が鮫田先輩。
「鳥井田　岳　ＤＦ」
のっぺりとした大柄の壁みたいな人が鳥井田先輩。
「以上3名が現在の間是和中学の誇るサッカー部の一軍メンバーとなりまーす。」
是和先輩がドヤ顔で胸を貼っている。

「僕は…サッカーをやりに来ました。」
「うん？」
「やりましょう先輩…サッカーを」
集めよう。部員を揃えよう、戦士を。
◇
だいぶ尖った子が入ってきたなぁって僕、是和新汰は頭を書きながら感じていた。
「先輩方はサッカーに対してやる気を持ってますか？　」
「なんだこの？生意気な1年はいきなりサッカーがどうのって。この学校は部活動に何がなんでも入んなきゃいけねーから入ってるだけだってのやる気なんてねーよ。」
「まぁまぁ鮫田君落ち着いて。」
ほーらー家の爆弾にすーぐ火がついちゃう、1度着いたら爆ぜるまで収まんないよ？めんどくさいったらないよ。
「おいどんも別にサッカーは出来なくてもいいかなぁ。」
「鳥井田君まで。」
そうなのだこの2人が入ったのは去年の引退試合にて3年の先輩達がゴッソリと抜けた後。とりあえず廃部にさせまいと無理やり札付きの問題児を捩じ込んだ父さん達の粋な計らいである。
「そうですか、分かりました。では僕とサッカーしません？僕に勝てたら練習なんて参加しなくてもいいですし、雑用なりなんなり全部こなして上げます、ルールは無しで構えません。ラフプレーだって全面的に許容します。ただ1点…先輩方は僕から1点取ってください。僕は勝ちの条件無しで大丈夫です。先輩達が参ったって言うまで付き合いますよ？」
「言うじゃねーかクソガキが。先輩がその根性叩き直してやるよ。」
◇
大変な事になったなぁ、本来キャプテンならこんな状況止めなきゃならないんだけど。火のついた鮫田を止めるなんてそっちのが危険だ。
「おでキーパーやる。動きたくないし。」

「木偶の坊は突っ立ってろ2秒で片をつけてやる。」
なーんかあの子やな感じするんだよなぁ。
「一応レフェリーに陸部の先生に無理言って来てもらいました。それじゃあ先生、笛だけお願いします。」
「はぁ、まぁいいか『ピー』」
試合開始の合図だ今はもう殆ど使われてないサッカーコートの半分だけで行われるミニゲーム、もう半分は陸部の二軍が使ってる。そんな陸部の子達も練習サボってこっちを見てるくらいだ。
「おぉら！先手必勝!!何でもありだ！怪我しても知らねぇからなぁ!!」
鮫田が宣言道理に殴りかかりに行く。喧嘩屋鮫田とはよく言ったもので荒事に慣れ、手加減を知らない拳が田中くんに当たっ…てない!?
「ジャッジスルー」
田中くんはあろう事かボールを鮫田にパスしてそのままボール越しに鈍い音を立てて鮫田君を蹴り飛ばす。
「いっいまのはファール…」
「だと思いますか？先生。」
小柄な女生徒が陸部の先生の横に立って何やら熱烈に解説してる。
「グッゴホッ…アァふざけやがってェ!!」
鮫田君がもう一度掴みかかろうとするがボールをキープしたままひらりと躱されてしまう。顔面から地面にキッスする鮫田君。
「先輩大丈夫ですか？ハンカチ使います？」
「クッソッガァ!!」
鮫田君はきっと学習しないのだろう。同じ事を繰り返し何度も地面にキッスをする。
「なにボーッと突っ立ってるんです？」
田中くんの動作は本当にパスを回すがごとく軽く、本当に軽く打ったであろうボールが。
「ん？グボッ!?」
ゴール前で突っ立ってた鳥井田君をボールと共にゴールネットに

押し込んでしまった。
「どうします？まだやります？」
　テーンテーンとボールが地面を跳ねる音が木霊する、悪魔の問いかけにしか聞こえないそのセリフ。
　残ったのはどうやら僕だけとなってしまったらしい。鮫田君は地面にて満身創痍、同じく鳥井田くんも腹を抑えてうずくまっている。
「いやーー降参っしょっこれは」
「聞き分けが良くて助かります。それじゃあ先生ホイッスルをお願いします。」
「あっあぁ！『ピー』」
「それと練習で怪我をしてしまったので保健室の場所教えていただきますか？」
　これが？練習？あくまで練習で通すつもりか？確かに彼は最初のジャッシスルー以外普通にドリブルして普通にシュートを決めただけである。ただその威力がどれも桁外れでいただけで。
「明日から部員集めと強化練習を並行して行うんで。よろしくお願いしますね？キャプテン。」
「ハッハハよっよろしく」
　乾いた笑みを出せた事を褒めて欲しいね。

小さい勇気

入学早々にちょっとした問題を起こした僕は先生方から少しのお説教を頂いた。あんな一方的な事しといて何故少しで済んだのかって？それはなんと陸部の先生が僕のことを庇ってくれたからであーる。まぁジャッジスルー以外は普通のサッカーだし、なんならあれぐらいＦＦに出ればいくらでも味わう事になる行為の一端に過ぎない。現に帝国にはキラースライドだったりが存在するし、ＧＯの世界に行けばマッドジャグラーとかいう頭悪悪な技もある。

まぁそんな話しはさておいて、入学式からはや１週間が経過している。サッカー部は一応朝練と放課後練習の２回に分けて行われてる訳だが、部員に変動は無し。サッカーコートも変わらずに陸部の二軍が無断使用している状況である。一応サッカーやってたって言う噂の子達は何人か声をかけたけど僕のせいでサッカー部そのものに黒い噂がたち始めてしまって元も子もない状態なのだ。

本格的にツーモである、今年のＦＦまでには絶対間に合わないとして。せめて来年までには世宇子を倒せるまでに部員を魔改造もとい基礎教科を終えて起きたいのだ。何故本史が来年だと分かってるのかって？僕のバックに着いてる幼なじみを舐めないで貰いたい。帝国のメンバー票はもちろんの事どこからか雷門中の近況報告まで入れてくる始末だ。なんか近場の監視カメラをハックしてプログラムを差し替えたとかうんぬんかんぬん。本人曰く淑女の嗜みとか何とか言ってのけたから余計に怖くなってくる。まあ使えるものは深く考えずに使って行こうと思う。

「キャプテーンなんか部員増やすいい方法ありませんかぁ？」

「そんなのあったらとっくにやってる…よっと」

今は朝練の真っ只中サッカーコートの片隅で２人だけでパス連しているのである。鮫田先輩や鳥井田先輩は流石に朝練まで出張ってはくれない、午後練に来てくれるだけでも僥倖と言った感じではあるが…深くは望まない。

「というか１年勧誘は田中くんの領分で…しょっ！」

かなり強めのパスを軽く足でトラップして倍の力で跳ね返す。
「ちょわぁ！なーにすんのさ！」
先輩は飄々と僕基準の強めのパスをトラップして見せた。こういった事軽々やってのけるは多分先輩も長い事サッカーに従事していた証拠だろう。
「今わざと力強めたのわかってるんですからね。やり返される覚悟の上だと思ったんですが…違いました？」
「可愛げのない後輩だこと。」
◈
皆さん初めまして僕、多摩裕次郎と言います…間是和中に進学してはや1週間が経ち、新1年生もクラスに慣れてきた頃合ですが。
「ヒュイッ！」
ガンっと相手の足が僕のことを逃がさないと言わんばかりに壁ドンを決め込んできました。
「なぁ？自分の立場…わかってんの？」
僕は絶賛部活棟の体育館裏にてカツアゲされている真っ最中です。
事の始まりは本当についさっきの出来事です。そろそろどこかの部活に腰を下ろさないと行けない時期になってきたので放課後、どこを見学させてもらおうかと部活棟をウロウロしていると大柄の先輩にぶつかってしまいそのままなし崩し的に…と言う感じです。
「ぶつかった腹のとこぉ痛むんですけど？」
先輩は足を下ろしてそのまま僕の胸ぐらを掴んで小柄な体を易易と持ち上げてしまう。
「ゆっゆるし…」
「あぁ？腹から声だせ…あ？」
先輩の肩に唐突に手が置かれて先輩はゆっくりと振り向いて行く。
「おいおいここは俺のベストスポットだってのにギャーギャー猿みてぇに喚きやがって…どう言う領分なんですか？アァ？」
ひっひぇー別のヤンキーが乱入してきたぁ僕もう終わりだぁこのまま小学校の時みたいにいじめが始まっちゃうんだぁ。あぁダメだ目尻からほんのり汁が…

「さっ鮫田さん…いや！あんたは1年の奴に負けちまったらしいじゃないすか。そんなあんた怖くなんて…」
　先輩と呼ぶのもはばかれるヤンキー1がヤンキー2に向かって怯えながらも対抗してみせる。
「へーお前…それで俺に勝てるとでもいーぜぇその喧嘩高く買って…」
　くっクロー○だ！ヤンキー抗争だ！なんでこんな場違いな場所に僕なんかが!!そんな半ば現実逃避みたいなことを考えていると、また別の人がヤンキー2の人の後ろにぬっと現れる。
「鮫田せーんぱい」
「にょわぁぁぁ!?!!たったなか!?ちっちがうんだ！決してサボって一服キメようとか思ってた訳じゃなくて…」
　ヤンキー2の人が田中と言うサッカーボールを脇に抱えた、至って平凡な苗字の人に先程の覇気はどこへやらと言った感じでヘコヘコしている。
「へー…言うに事欠いて言い訳…ですか？分かりました、えー分かりました共…学校の周りを30周の走り込みですね。カウントには小百合ちゃんを着けます。みっちりと腐った根性及び体力を叩き直して来てください。」
「じっ慈悲は!?」
「まだなにか？」
「いえ！不詳鮫田！喜んで外周走ってきます!!」
　ヤンキー2の人は滝汗を流しながらすたこらと言った感じで死に体で去っていく。
「くっハハハハこりゃ傑作だ！ほんとに落ちるとこまで堕ちちまったなぁ。鮫田さんヨォ」
　ヤンキー1はヒィヒィと笑ってのけてサイドボクに向き直る。
「さて…それじゃあお前…有り金全部置いて…」
　ダメだこれはもはや蜘蛛の糸だ！あの強面のヤンキー2の人を追っ払ったこの人なら!!
「たっ田中さん!!たっ助けてください!!」

言えた…言って見せたぞ
「うーん構いませが…対価は大きいですよ？」
「へっ？」「ほー？」
ヤンキー1と声が重なる。対価…対価って…
「出せるものなら出します！だからとにかく！」
現状より悪くなってしまうかもしれないが、これは賭けだがこの後振るわれるだろう悪逆に比べたらまだリスクを追った方が希望がある、もうその希望に縋るしかないのだ。
「分かりました契約成立ですね。」
「てめぇやろうってのか？」
「うーんでも僕…少し前に厄介おかしたばっかでもう余り目立った事ができないんですよね。」
「しるか！バーカ！」
ヤンキー1の大ぶりの拳が真っ直ぐに田中くんの頬を捉える。それを田中くんは真っ向から食らってしまって大きく後退して…微動だにしてない!?
「これで僕は被害者ですね？覚悟しろよ？単細胞チンパン」
田中くんは脇のボールをヤンキー1の腹に軽めに渡す。
「あ？…グボァ!?!?!」
何が起こったのか一切理解できなかった。ボールを挟んで田中くんが何度もヤンキー1の事を膝蹴りをお見舞いするというよく分からない光景が広がる。
「マッドジャグラー…かーらのー」

ヤンキー1が空中にへの字に放り出されて。そのまま、またボールを挟んで今度は顔に向かってボール再度あてがう。
「ジャッジスルー…」
正直見てられなかった、酷い蹂躙を見せられた。暴行の限りを尽くされたヤンキーは気を失って背中から地面に鈍い音を建てて落下する。
「さて…先ずは行きますか、保健室。」

悪魔(田中くん)はヤンキー1を担いで笑顔で歩み出した。
◇
　田中健太、今学校を賑わせてる札付きの不良という反面、特待生枠の1位を獲得し新入生代表を任せれた超がつくほどの優等生と言う1面も持つ。校内での立ち振る舞いも敬語を崩さず物腰柔らかで評判が良く、特待生枠1位の肩書きに恥じない人物である。しかし、入学式初日に自分の所属するサッカー部の先輩を蹂躙するという頭のおかしい暴挙にでたり噂を聞きつけたヤンキーの人達を片っ端から正当防衛を盾に蹂躙するよく分からない人と言うのが1週間で着いた彼の学校全体での印象である。田中という苗字が一般的すぎて最初は誰か分からなかったが、確かにサッカーボールをもってたりヤンキーの先輩を顎で使ったりと色々当てはまる事は多かったと思う。なぜ気づかなかった。
「はい。とりあえずこの子は保健室で休ませて起きますが、いい加減にして欲しいものね。これで何件目だと思ってるの?」
「しょーがないと思いますよこちらは望んでなくともあちら側から寄ってきては被害者ヅラするんですから。被害者は間違いなくこっちで僕は仕方なく正「正当防衛」むぅ…」
「何回貴方と同じやり取りしたとおもってるの…いい!絡まれたら逃げて教員に頼む事!毎度毎度看病するこっちの身にも…」
「まぁ逃げれたら逃げますよ。」
　保健医の先生も呆れ気味である。
◇
　場所は変わって再度部活棟まで戻ってきた。
「それじゃあ先ず自己紹介と例の件を僕は田中健太サッカー部所属だよ。」
「たっ多摩裕次郎(ゆうじろう)と言います!1年です!」
　どっどんな無理難題を押し付けられる事やら…内心ヒヤヒヤしっぱなしである。
「ハハッ元気な事はいい事だね。それじゃあ約束の内容はぁー」
「なっ内容は」

「サッカー部に入部してくれないか？」
「え？」
　聞き違いだろうか？サッカー部に入部と…
「ん？だから…家のサッカー部を救う救世主1号になって欲しいんだ。」
「そんな事で…いいんですか？」
「そんな事とは失敬な…とても大事な事だよ？裕次郎君。もちろんこれは強制で拒否権なんてないと思ってね。」
　それで済むなら万々歳！
「よっヨロシクお願いします！」
「ふふっじゃあまずは部室に案内するね」
「はっはい！」
　僕の超次元サッカーはここから始まる。

通過儀礼

今年のＦＦは見送りになるか…時刻は３…３０われら
部室で小百合ちゃんの集めた紙媒体のデータに目を通しながら思い耽る。現部員の総勢５名…そのうち３名は最近ボールに触れ出した素人。どうやったって今年の５月のＦＦに間に合うわけがない。あまりによろしく無い状況に無意識で人差し指をガジガジしてしまう。
幸いなのは鬼道、有人と思われる人物が今年の帝国の入学式に新入生として出席していたことである。
小百合ちゃんから貰ったデータの帝国学園の項目を閲覧しながらコーヒーを１口、口に運ぶ
流石の帝国…小百合ちゃんがいくら頑張っても雀の涙程度しか情報を得ることはできない。しかし選手の特徴だったり、監督の癖だったりフォーメーションの偏りだったりを練習試合や学校潰しの試合だったりで事細かくまとめあげてるのは脱帽の一言である。
鬼道有人が同期だと言う事は円堂守達とも同期なのだ。口角が無意識に上がるのを感じる。楽しみで仕方ないのだ、作中であのレベルの練度を誇るプレーの数々がこの目で確かめる事が出来る…復讐をこなす上で最も危惧していたものである時系列の違い…すなわち、ねぇさんが事故にあって自分が中学進学するまでの３年間で原作がスタートしてしまわないか否か。それだけが怖かった。
あぁ…待っているといいさ帝国学園…僕はこの手で最強のイレブンを作り出し、君たちの思想を全て粉々に砕いて見せよう…
「たーなかっ君。頭おかしい程気持ち悪い笑みを浮かべているね、練習はしなくていーのかい？」
「他校のデータ閲覧くらいゆっくりさせてくださいよぉ」
爽やかな汗をかきながら前髪をかきあげる是和先輩、その裏にはヘロヘロになった我らサッカー部員一同…
「キッきつい！初日から…この量は！たったおれ…っ」
「多摩っち何よりも大事なのは体力なんよねー、だから先ずはこれく

らい片手間で済ませるレベルになんなきゃ、それは鮫田君や鳥井田君にも言えるからね。」
先輩達も返答できないレベルでヘロヘロである。
これじゃあボールを使ったまともな練習なんていつになってしまう事やら…
「皆さん練習お疲れ様です、朗報をお持ちしましたよ。」
小百合ちゃんがクラスの仕事を終えて部室に顔を出す。
「ほうほう、来て速攻朗報とな…余程良い事なのかね？その朗報とは？」
是和先輩がキメ顔で催促する。
「それでは早速。前にけんちゃんにはお話しましたが…過去にサッカーを経験している方々に個人的にお声かけしてまして…今回なんと！数名、私の甲斐甲斐しい勧誘にお答えしてサッカー部への入部が決定致しました！」
ほう…新部員。それも経験者と来たもんだ、いや経験者と一概に行ってもプレイはきっとエンジョイの範疇を出る事は無いだろう。日ノ元の時のサッカーを参考にしても必殺シュートだったり必殺ブロックだったりを覚えてる人は稀であった。
「何人くらいの入部希望なのかな小百合ちゃん。」
5人…は欲張りすぎだな…せめて3人。
「そうですね…」
小百合ちゃんはゴソゴソとカバンからファイルを取り出してそこから僕が先程見ていた書類と同じような紙を取り出して大まかな情報を提示していく
「ミッド志望が1人と、フォワード志望が1人、後はキーパーですかね、後は実際に自己紹介してもらいましょうか。」
「やっとですかい…長々とまたせるとは、どういう良兼です？」
「いやはや、軽い質疑応答ですよ。では自己紹介、お願いします。」
「ちっまぁいい…先ずは俺からだな。御剣謙信、FW志望。サッカー歴は6…7年くらいだ。まぁサッカー部には後々きちんと入るつもりだったが…まぁこんな形も悪かぁねぇだろって事で今回の話に乗

せてもらったって感じだな。今日から3年感しっかりやってくんでよろしくぅ。」
　御剣？何処かで聞いた記憶が……ダメだ思い出せない。でもなんか肉の筋が歯の隙間に挟まった時みたいな気持ちになる、どこでこの名を聞いたか。
　しかし6年の経験は普通に高評価である。彼の立ち居振る舞いを見ても強者としての慢心や余裕と言った者を感じ取れる、まさにその剣の名に恥じぬ男である。
「んじゃあ次は俺っちすね。恐神隆治、ＫＰ志望。サッカー歴はそこの御剣と一緒っす。得意技はドラゴン・ジョーって言う奴なんで。まあゴールは任せろーって感じでよろしくっす。」
　イナイレ特有の低身長ボーイこと隆治君、こちらも強者の威風がビンビンに感じられる。ギラついた瞳にこちらに対しての隠すつもりもない闘志はいっそ清々しい。
「凪颯太、ポジションはそこの女が言ってたろ、消去法で考えてくれ。あぁでも僕は天才だからポジションに拘るわけではないんでね好きに扱ってくれて構わないよ。フッ泥臭い連中ではあるが、しっかりとやってくれればそれで構わない。後、僕には練習と業務連絡以外で話しかけるないでくれるかな？雑多共と馴れ合うつもりはないんでね。」
「んだとぉてめぇ!?」
　鮫田先輩が例の如くしっかりと噛み付いて行く。まぁ鮫田先輩なら噛み付くだろうね、逆にここで大人しくしてたら病気を疑う。
「まぁまぁ落ち着こ？鮫田君。」
「ふっ全くだ…品性の欠けらも無い、結局雑兵の集いということか。僕が用があるのは…そこの冴えない男ただ1人…田中健太！…貴様だ。噂だけは聞いていた東地区の新人戦得点王を記録した日ノ元のエース…しかし、突然サッカーから身を引いた天才。この僕を差し置いてサッカーの天才や神童の名を欲しいままにするなぞ、あってはならない！」
　なんだコイツ（なんだコイツ）おっとなんだコイツになんだコイツ

と言う感情が付随してしまった…よろしくないな。何言ってんだ僕は
「小百合ちゃん、データ見せて」
「うんいいよ」
冷静に行こう、先ずは情報が欲しい
「なんだ、貴様。この僕に恐慄いているな?そうだろう!フッ所詮は誇張評価の噂だ。それもそのはずこんな覇気も何もない冴えない男が!かの最強の得点王な筈がない!あぁガッカリだ非常にガッカリだ。」
ふむふむ凪颯太、一花スポーツチーム所属のサッカー歴2年…成長性は著しくボールに触れて1年足らずでチームのエースに就任…傲慢知己なプレイングで他者を鑑みない様相を示す、しかしその正確で容赦のない洗練されたプレイングは見る者を感嘆させる姿はさながら奇術師のようである…と。
「わかった。じゃあ君たちがどれほどすごいのか僕に見せて欲しいな。」
相手の実力を測るにおいて最も簡単な方法それは…
「シューズは持ってきてる?ないならランニングシューズでいいから。コートにでよっか?サッカー…やろうや」

◇

空気が変わった。そう言わざる追えない程にヤツの身に纏う雰囲気が柔らかな物から刺々しいものへと変容した…特にヤツが激情してる訳じゃない、ただボールに触れた、それだけで重く苦しく淀んだ物にここら一体を変容させたのだ。
「準備はいいかい…ルールは3先だよ?何でもありだから全力で勝ちに来てね。」
圧倒的にこちらはゴールに隆治、両サイドに俺と凪とかいうリア狂野郎。やつがどれだけ強かろうと負ける道理なんて存在しなかった。
「ふっ…とんだ茶番だ宣言しよう今から30秒以内に僕は君から1点

を取得する。」
「あらそう?それは楽しみだ。それじゃあ先生!試合開始の合図をお願いします。」
「了解した『ピー』」
「後悔しても知らないからね!ぶんしんディフェンス!!」
あぁくそ!いきなりツッコミやがった!しゃーねぇ合わせてやるか。
「2人で挟むぞアースモア!!」
俺は奴のディフェンス技に合わせて地面を踏みつけて土の刃を顕現させる。しかし田中は怒涛のディフェンスをボールと共に幻影が如くと言った様子で軽々といなしてしまう。
「面白い技を使うね…うん期待がいい意味で外れてくれたね!」
ちっ諦めきれるか。俺は悔しさ半分と言った感じに必殺技を使わずに正攻法でブロックを入れる。
「うん素晴らしいスライディングだ、成長が楽しみでならないよ。でも君たちのシュートも見てみたいな。」
「舐めるなぁ!!!」
凪が顔を怒りに歪めてボールを奪おうとするが足さばきいなされて転ばされてしまう。
「ふむ…うんいいくらいつきだよ想像以上だ凪くん。次はキーパーの力が気になるな…そぉれっ!」
田中は凪を抜いてなんでもないと言った感じでただのシュートをゴールに放った。そう…ただのシュートである、必殺技では無く、ごくごく普通の真っ直ぐ飛んでく…だがそれは。
「ッ!?ドラゴン!!!ジョーォォォオオオ!!!」
隆治の背後から竜骨の頭が出現してソニックブームを発生させながら突き進むボールを受け止める。
「ウッ…グゥフゥ!?ッ…なんなんスカこの威力。これがただのシュートって嘘っスよね?。頭おかしいっスよ」
隆治は顔を歪ませながら死に体でボールを止める。
「うーんノーマルシュート相手に悪戦苦闘は…まぁ多少なりとも気を

纏わせてたからノーマルとも言い難いか、今後は僕のシュート中心に練習組もうか。」
「ひぃ!?勘弁ッスよ!?」
俺も勘弁したい。隆治の悲鳴はごもっともである。田中は顎に手を添えて奴の守るべきゴールにゆっくりと歩き出した。
「次は君たちの番だよ?おいで?」
やつは手を後ろで組んで。足をブンブンと振り回している舐められたものである。

「よこせ!隆治!南橋の御剣様を見せてやる!」
「わかったスよ謙信!」
ボールは真っ直ぐ俺に飛んでくるが。
「邪魔だ雑種!どけ!」
「うおっち!危ねーじゃねーかリア狂野郎!」
リア狂のゴミが乱暴に俺からボールをくすねていく。
「僕は天才だ!そんな僕が!屈辱的敗退なんて!あってはならない!」
奴の周りの気が変容する。
「グロリアスゥ・ヘブゥゥゥゥン!!!」
奴を中心に花園が展開していき白いオーラが雷を纏いながらボールを包み田中目掛けて物凄い質量を持って突き進む。
「おっ…これは手強い。」
やつはなんことかボソリと呟いてゴール前でグロリアス・ヘブンを迎え撃つ。
「貫けぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「そうだね…君のシュートに敬意払って僕も全力でこれに対応しよう。」
奴の…全力だと?
「ハァァァァァ!!!」
奴の背後に禍々しい色合いをした巨人の上半身が出現しグロリアス・ヘブンに剣を使って対応する。

「罪ノ大剣!!!」
巨人が剣で大地を抉りながらシュートを打ち返す、それは大気を震わせ風圧だけで俺と凪を吹き飛ばす。
「ドラゴン…ジョーオオオオオオオオ!!!!うっうわーーー!?」
奴のシュートはゴールを破壊してネットを巻き込みながらボールを消滅させた。
「ばっ化け者が。」
辛うじて口から出たのがこの一言だけだった。

サブタイトルって難しいよね

けんちゃんがゴールやコートをハチャメチャにして理事長室にお呼ばれされてしまいました。
「あれが日ノ元の天才…」
御剣君がぽつりと吐き出す。
「なんスかあのレベル頭沸いてんじゃ無いっスか？いや…別に実力否定じゃなくてなんでこんな無名の中学に来てるかって意味スっよ…もっと帝国とかさぁ。」
「けんちゃん帝国大嫌いだもん、そんなとこでサッカーなんて出来っこないよ」
けんちゃんの帝国嫌いは帝国を調べてれば自ずとわかってしまうが余り触れるのも宜しくないのだ。
「僕の…グロリアス・ヘブンが…あんな簡単に、僕は天才たぞ、天才なんだぞ…僕が僕は僕、僕？僕は天才だろ？そうだろ？悪い夢か何かか？そうか夢だなこれは！ククククハーハッハッハ！そりゃそうだ！じゃなきゃ僕のグロリアス・ヘブンがあんな児戯よろしく軽く止められてたまるものか!!認めん！僕は絶対に！認めん!!」
「うっせーな…負けたんだよ俺たちは。たった1人に…完膚なきまでにな。認めろ厨二病のリア狂野郎」
「黙れェ!!貴様如きが知った口を効くなァ！」
…凪君を誘ったのは失敗だったかも知りませんね。ですが彼の実力はあの歪んだ性格を考慮しても捨て置ける代物ではありません。一応日ノ元でマネージャーモドキを行っていたので他の選手と触れ合う機会も多くあったのですがその時の事を思い返してもあのレベルの選手は中々いません…先程けんちゃんが何故帝国では無く間是和に来たのかと聞かれましたが…彼の方が何故帝国では無くこちらに…と問いたい気持ちが多くあります。
「フッ…貴様の様な劣等には崇高な僕の気持ちなんて分かるわけが無いのだよ」
「わかってたまっかよリア狂の気持ちなんてなぁ！」

「ふたりとも抑えてください!!」
今にも殴り合いそうな2人を宥めようとあいさにはいって静止を促すが当然効果なし。
「そっそうすよ!暴れるのは不味いッスよぉ!」
◇
是和先輩と一緒に理事長先生に頭を下げ終えて部室戻る。
「にしてもほんとに君の蹴りは凄まじいね…まさかゴール事破壊してしまうなんて。」
まぁあれが全力ではないにしろ今自分が打つことが出来る最上級のシュート罪ノ大剣を一端のゴールが耐えられる筈が無い。
「まぁ謙遜はしないどきますよ。素直に認めます僕の罪ノ大剣は現時点で日本一のシュートだと思いますよ?」
「ほう…現時点で…ね。」
「ええ…現時点では…ね。」
先輩と含みのある間の取り方をしながら程々に談笑しながら部室に戻る。
「ヤァッハロー!皆元気してたー?」
先輩が超ハイテンションで部室のドアを思い切り開く。僕もため息を着きながら部室に入ろうとするが中で起こっていた事態は惨状の一言に尽きる。
倒れ伏せる鮫田先輩や鳥井田先輩、鬼の形相の凪君や青筋浮かべた御剣君、それの2人を羽交い締めして止めている恐神君と小百合ちゃん。そして隅っこで頭を抱えて小さくなっている多摩君。
「良かったですね是和先輩。元気有り余ってますよ」
皮肉を込めて先輩に耳打ちしてみるが先輩は片腕あげて挨拶した状態で完全に止まってしまっている。ダメだなこれは。
「田中くん!良かった来てくれたんだね!はっ早くこの事態をどうにかしてくれ!ぼっ僕にはどうやっても…ウヒ―!?」
多摩君がハイハイでこちらににじりよってきて懇願してする。
「はぁ…先輩は御剣君の方をお願いします。」

「は？何言って…」
　とりあえず小百合ちゃんに抑えられながら腕や足をばたつかせて御剣君に掴みかかろうとしている凪君の前に立つ。
「なーぎ君、僕の声は分かるかな？」
「＊？—☆　—〜〜！＊？……!!!」
　うーん何言ってんだろ…およそ言語化も難しい何かをベチャベチャと喚いているし唾が僕の顔にベチャベチャと当たる。それに小百合ちゃんが早く何とかしてくれと言う表情で見つめている。仕方ない、手荒なマネは趣味じゃないんだけどな。
「はぁ…3秒だよ3秒間だけ待ったげるから落ち着きな、」
　頭を空っぽにして目の前にボールを浮かべる。対象は喚いてる
「さーん」
　手をポケットに突っ込んで片足を少し脱力させる。対象は黙る気配は無い
「にー」
　足に少し…ほんの少しだけ気を纏わせる。対象は最早止まらない
「いち」
　世界がスローになっていく目の前の対象はもはやボールだ。
「ゼロだ。タイムオーバーだよ…」
デ　ス　ソ　ー　ド
　凪君の腹をボールに見立てて軽く蹴り抜く。小百合ちゃんに被害が及ばないように、凪くんのみが丁度よく蹲る程度の軽い蹴りだ。これで正気に戻ってくれなきゃもうどうしようもないお手上げというやつである。
　次は顔面にファイアトルネードぶち込んで豪炎寺メンタルクリニックもどきでも開かざるおえないだろう。
「助かったよけんちゃん、ありがとう。」
「大丈夫小百合ちゃん痛くなかった？」
　その必要は無さそうだが。
「田中健太ァ…ゲホッガハッ何をする!?貴様!!」
　効果的面である。少し荒療治ではあるが上手く正気に戻ってくれ

たみたいで助かる。
「対話できる状態じゃなかったからね、まぁすまないと思ってるけどクレームの類いは受け付けて降りませんので悪しからず。」
御剣君の方を見ると是和先輩が上手くやってくれたのか、それとも僕のデスソードが衝撃だったのか目を大きく見開いて驚愕と言った表情を浮かべている。
「それじゃあ2人ともなんでこんな事になってるか…教えてくれるかな。」
入部初日に問題起こすなんて飛んだヤンチャさん達である。
◇
大体の事情は把握出来た、どうやら僕に負けたのがよっぽど応えてしまったらしい。僕からしたら御剣君も凪くんも恐神君だって今の日本サッカーのレベルを優に逸していると思うけどな。御剣君の必殺技は見ずじまいだったが恐神君のドラゴン・ジョーは現時点でリフレクトバスターぐらいなら軽く止めれてしまえる練度を有してるしグロリアス・ヘブンについてはＦＦでも最高峰のシュートと言えよう。流石にエイリアの必殺技には見劣りしてしまうかもしれないが現時点では文句のつけようのないシュートである。
「まぁ理解はしたよ、君の悔しさや、やるせのなさは痛いくらいに伝わった。でも厳しく言わせて欲しい…自惚れるなよ凪颯太。君が見てきた世界はとても狭い、今の君では僕如きに勝つ事は決して出来ないだろう。」
凪君が完成された美顔をこれでもかと歪まして僕の言葉に嫌悪を示す。
「1人では厳しい…だから高め合うんだよ今地に伏せて寝ている先輩方に君の事を宥めてい人や君の争い相手になっていた人とね。彼等の潜在能力や現在発揮している能力、全て含めたとしても君と遜色はないんだよ。そんな彼等と一緒に来年には僕に地面の土を舐めさせるべきだよ。」
凪颯太は間違いなく天才である。サッカー歴わずか2年にして強大なシュート技を持つ彼。しかしここに居る部員全員彼に見劣りす

ることはきっとないだろう。彼ほど伸びる事はないのかもしれないが彼にとって高め合うものとしては満点の効力を発揮する。
「サッカーは個人スポーツではない。僕だってチームメイト相手にパスを出すし3人程マークされたら少し辛いんだ。だから君もチームを理解して利用して自らを昇華させて行かなければならない。僕を討て凪颯太…いや間是和サッカー部。君達が輝き、その実力の開花に敵が必要なのだと言うならば喜んで僕が敵になろう。」
「今は…勝てない…か。」
御剣君がボソリと呟く。
「今勝つ必要なんてどこにも無いさ。最後に勝って参ったと言わせて靴を舐めさせた方が勝者であるんだ。」
終わりよければなんとやらの精神である。
「味方を利用か…フッいいだろう!感謝しろ愚図ども。この僕が自らを高め目の前の巨悪を討つという大願の為に貴様らを使用してやろう!道具になる事くらいなら貴様らにも可能だろう!」
「ケッ…結局どうしたってバカは治らねぇか。」
「まぁ諦めるのが吉ッスよ御剣。」
「間違いねぇな」
まぁ騒動も歪んでいるが一応の収集が着いた、これにて落着である。

「あっそうだ是和先輩鮫田先輩や鳥井田先輩を起こしてください。今後の部の方針…決めちゃいましょ。」
「もう君がキャプテンでいいんじゃないかな?」
「ハッハッハ、なーに言ってるですかキャプテン。キャプテンなんて器じゃないですよ。」

暫くして鳥井田先輩や鮫田先輩がモゾモゾと目を覚まして現状の確認と様態の確認を追えてミーティングを開始する。
「えーそれじゃあ間是和サッカー部のミーティングを始めまーす。ここからの進行は我らサッカー部の問題児こと田中健太氏に丸投げす

るんであとよろすくー。」
「キャプテン軽くないですか？まぁいいやえーと進行変わりまして田中で進めさせていただきます。」
「能書きはいらん、とっとと進めろ」
　凪君がムスッと言い放つ。可愛げがないんだからまったく…
「んじゃあ大題と目先の目標を述べるね。大題の方はＦＦ優勝、目先は帝国学園の打倒。これで行こう、異論は認めません。以上」
「聞き間違いかなぁ？田中くん…てっ帝国の打倒って…」
「そんなわけないじゃないか多摩君、殺るんだよ帝国学園を…それも苦勝や辛勝じゃない。ダブルスコア、ないしはトリプルスコアを付けて徹底的にやるんだ。」
「フッまぁ妥当な線だろうな」
「黙ってろ！リア狂！てめぇら帝国がどんなとこか知ってそんな事…」
「声を荒らげるなよ御剣君、知っているさ。あぁ知っているともさ…それを踏まえて言わせて貰おう…帝国なんて雑魚だよ御剣。」
「なぁ話の腰を折るようで悪ぃけどよぉ帝国ってなんだ？」
「おいどんも知りたいどす。」
　あぁサッカー初心者の先輩方はご存知ないのか。
「帝国学園…現中学サッカーにて３９年…いや今年も含めて４０年間無敗という偉業をこなしている超が着く強豪校。僕達弱小からしたら言葉に出す事すら烏滸がましい天上の存在。それが帝国学園サ」
「実感わかねぇーなぁ」
　鮫田先輩は目を明後日にやりながら後頭部をガシガシする。禿げちゃいますよそんなことしてたら。
「キャプテンや御剣君は帝国の試合見た事あります？」
「そりゃサッカーやってたら１度は見るだろうよＦＦ決勝なんて見てみて損は無いだろうし。」
　キャプテンもコクコクと頷く
「それを踏まえて聞きますよ彼等帝国最強の技デスゾーン…あれはどう写りましたか？そして恐神君…君の意見も聞かせてください。」

「そりゃ恐ろしいの一言に尽きるだろうよ3人の連携技。必殺技の基本だろうが、1より2、2より3倍々方式で威力難易度共に上昇していくんだ。そんな難易度の高い3人技をあんな平然と打たれちまったら溜まったもんじゃねーよ」
「そっそうッスよあんなん止めようとしたら身体が思いっきり吹き飛んじまうッスよ！」
「それに帝国の強さはシュートだけじゃねぇだろ。あの悍ましいレベルの管理サッカー…奴らの軍人もかくやと言われる脅威の連携と鉄壁の守り…39年間無敗もうなずけるプレイングだぞ。」
　御剣君の言うとおりである。帝国の最大の象徴影山零治による冷徹で冷酷な管理サッカー…それに今年から天才ゲームメーカーである鬼道有人も加わってその連携に拍車も掛けていく事だろう。
「それが何か障害になり得ますか？」
「てめぇ…何言って。」
「今ここにもう帝国を上回るスペックの持ち主が4人…いや5人いますね。」
「は？5人って…まさか!?買いかぶるのも大概に…」
「買いかぶり？とんでもない。滾る闘志を身に宿しあらゆるものを射抜かんとする九頭龍サッカークラブの元エースストライカー御剣謙信君、小さいながらも龍を幻視させる気迫を持つゴールの絶対守護者恐神隆二、的確な指示で味方を鼓舞させ勝利に導くフィールドの奇術魔と謳われた天才是和新汰、サッカー歴2年にしてとんでもない威力のシュートを放て、天才や神童の名を欲しいままにして尚成長が止まらない凪颯太、そして過去中学サッカー界に名を馳せた田中真弓の弟でありあらゆるポジションを完璧にこなせる日ノ元の天才こと田中健太…負ける道理なんてありますか？」
　自分で言ってて途中で恥ずかしくなってきたが嘘偽りなんてない。この場に居る経験者面々は一人一人がオーバーパワー、こんな木っ端の中学の廃部寸前のサッカー部で燻ってしまっていいと者では無い。
「出来ないなんて言わせませんよ…勝てます、否勝ちますよ帝国だけでなくFF出場校に圧倒的な実力で。」

あぁ来年が楽しみで仕方ない…まってろ原作、まってろ帝国、まってろ影山零治…貴様の野望を貴様の思想を僕達の手を持って完膚なきまでに叩き壊してやるよ…